

フランス語教育実情調査報告書

目次

前書き	2
要旨 教育機関（大学・短大・高専）アンケート	4
1. 教育機関（大学・短大・高等専門学校）向けアンケートの結果	7
2. 大学教員向けアンケートの結果	18
3. 大学生向けアンケートの結果	32
4. 高校機関向けアンケートの結果	51
5. 高校生向けアンケートの結果	71

作成 日本フランス語フランス文学会 白井恵一
日本フランス語教育学会 北山研二

フランス語教育実情調査報告書

フランス語のみならず日本の外国語教育をめぐる状況は近年劇的な変化を見せつつあります。その中には、さまざまな外国語に直接触れる機会が飛躍的に増大したというような肯定的変化もありますし、大学大綱化以来、外国語学習に割かれる授業時間が減少しつつあるという否定的な変化もあります。そのような状況の中で、日本におけるフランス語教育をめぐる状況の実際はどのようになっているのかを知ることが、われわれが今後のフランス語教育の方向を考えていくために重要であることは論を待たないでしょう。

日本フランス語フランス文学会ではこれまでも継続的にフランス語教育実状調査を、1978年、1980年、1985年、1989年、1995年、1999年と過去6回に行ってきました。今回は、やはり日本におけるフランス語教育に強い関心を抱いている日本フランス語教育学会と共同で調査にあたることになりました。

具体的には日本フランス語文学会からは、調査開始時点の語学教育委員長の小野潮及び副委員長の白井恵一、日本フランス語教育学会からはフランス語教育実状調査委員長の北山研二、副会長の土屋良二の4名が中心になり、方針を定め、機関、教員、学生に対する調査票を作成しました。アンケートの処理につきましては日本私学教育研究所の山崎吉朗氏のチームが担当してくださりました。厚く御礼を申し上げます。

今回の調査においては、その調査を始める以前の段階の準備段階から、フランス語教育をめぐる状況の劇的な、そして広範囲にわたる変化そのものが原因となって様々の困難が予想されていました。そのもっとも大きなものは、外国語教育を担う機関それ自体の形が多様化し、大学の初年次教育は「教養部」が担い、外国語もそこに含まれるという大綱化以前の形態が今日ではすっかり姿を消したということです。ですから各大学において、外国語教育を担う機関のありよう自体が大きく変化し、そもそも各機関の誰にフランス語教育の現状を尋ねればよいか非常にわかりにくくなっています。

したがって、以後にお示しするデータ、及び考察については、そのような条件のもとにお読みいただきたく存じます。

以下、まず今回のアンケートにおいて目立った点についての要旨を掲載し、その後に、機関について、教員アンケートについて、学生、高校生へのアンケートについて順に示していきます。

今回ここでお示ししているのは、中間報告というべき性質のものです。会員の皆様にこの中間報告をご覧いただき、それについての会員の皆さまそれぞれの分析、御意見をさらにこの中間報告に盛り込み、最終的な報告書とする予定です。ご感想・ご意見については、下記の両学会の実状調査担当者までご連絡をいただければ有難く存じます。

日本フランス語フランス文学会 白井恵一

shiraik@lab.twcu.ac.jp

日本フランス語教育学会

北山研二

kitayama@seiyo.ac.jp

要旨

教育機関（大学・短大・高専）アンケート

フランス語は相変わらず多くの大学で第二外国語として重要な地位を保ち続けている。だがフランス語を担当する教員を専任としておいている大学となるとその数はかなり減少する。

履修形態については、1, 2 年を通してフランス語を履修し続けている大学の数はやはり以前と比べると減少していると推測せざるを得ない。第二外国語を履修しなくても卒業できる大学もかなりの数に昇っている。

教育面では、フランス語科目の他にフランス文化関連科目を設けている大学、ネイティブ教員の授業をおいている大学がかなりの数にのぼる。CALL 教室の利用はフランス語教育においてはあまり見られない。

フランスへの短期留学の制度を大学として設けたり、またフランスの大学との交換留学の制度を持っている大学もかなりの数に昇る。

他方、フランス語入試を独自の問題でおこなっている大学は少ない。センター入試利用で入学試験受験を制度的には認めている大学はかなりの数に昇るが、これが実際に機能しているかどうかはわからない。

大学教員アンケート

フランス語教育をめぐる環境は厳しさをましている。非常勤教員への依存度の大きさ、教員平均年齢の高齢化、授業時間数の減少と、それにともなう教育内容の簡素化、到達目標の低下がアンケートからは読み取れる。

授業内容・方法に関しては文法・講読を中心とした「伝統的」教育が主流をなし、CALL 教室などを用いた授業は少数にとどまっている。このような方法が学生の支持を得ていないわけではないが、教員側が年々教科書が薄くなり、簡単になっていると感じている一方で、学生側はなお「フランス語が難しい」と感じている。

教授法の研修会や語学検定などについては、存在を知ってはいるが大学教員がこれらに対し積極的とは言えない状況にある。

大学生アンケート

大学生を対象とするアンケートからは、現場の印象や意見を裏付ける傾向とややそれらに反する傾向の両方が読み取れる。

フランス語選択の理由や授業評価はおおむね肯定的に見えるが、実際はその逆であるとも言える。授業は、過半数の大学生が満足していて、フランス語圏生活文化情報やフランス語そのものにも少なからず関心を抱き、「読み書き話し聞く総合的な授業」や伝統的な「文法・訳読中心の授業」を歓迎しているように見えるが、他方、実際は授業時間が長すぎるし、授業内容には大多数が文法や発音の習得に難しさを感じていて、フランス語学習の継続希望者は約6割しかいない。学生にとって望ましい能力養成となると、まずはフランス語による日常的な自己表現能力の養成であり、次に昔ながらの教養養成や語学力養成も期待されているが、過剰な授業内容を敬遠して、授業はもっと楽しく要点を押さえてもっとゆっくり進めてほしいという要望が多い。現場の教員が苦しみ矛盾的状况を反映している。ネイティブの授業、フランス語の検定試験受験、短期・長期の留学は多くの大学生が希望するが、実際は実行されていない。

教育機関（高校）アンケート

高校におけるフランス語教育は受験を目的とした第1外国語から異文化理解のツールとしての第2外国語教育へと中心が移動しているようである。特に公立高校で広がりを見せるフランス語教育だが、その大半は非常勤教員が担っており、学校内での十分な発言力も持っていないのが実情であろう。大学受験を前に、どのように生徒たちのフランス語・フランス文化への関心を高めるか。コンクール参加や検定試験受験といった形での学習目標の設定が多くの高校で行われている。またコリブリのような定期的な日仏相互交流も有効な手段となっている。

高校生アンケート

高校生を対象のアンケートは、現場の印象や意見を裏付けるものとなった。フランス語選択は多くの高校生がたとえ周囲に相談しても自らで決定している。その理由は、フランスに行ってみたい、授業が面白そうだからである。

実際の授業は、難しいが、楽しい・どちらかと言えば楽しいという反応が大多数を占めている。教養養成や語学養成中心の授業ではなく、多様なメディア使用、ゲーム、料理実習、寸劇・スケッチ等の体験学習や自己表現学習を取り

入れており、またフランス語学習が視野を広げたり、将来役立つと思っている高校生が多い。大学人が学ぶことは多い。

検定試験受験、短期・長期の留学は、多くの高校生が希望しているが、実際は実行されていない。

1. 教育機関（大学・短大・高等専門学校）向けアンケートの結果

0 - 1 大学・短大。高校の調査対象機関について

以前、フランス語教育実状調査をおこなった時点と現時点では、状況が大きく変わり、現在では多くの機関がそのカリキュラムの概要をホームページで公開している。以前の調査では、日本のすべての高等教育機関に調査票を送付したこともあったが、今回は郵送費の負担が膨大に昇ることから、事前にホームページで、それぞれの高等教育機関についてフランス語が教えられているか否かを調査し、フランス語が教えられていることが明瞭な機関、あるいはフランス語が教えられているか否か不明の機関に限って調査票を送付し、フランス語が教えられていないことが明瞭な機関については調査票を送付しなかった。このホームページを用いての調査には小野・白井・北山・土屋の他、フランス文学会の語学教育委員会委員である大阪市立大学の福島祥行氏、愛知県立大学の長沼圭一氏のご協力を得た。

各大学においてどの学部、どの学科がフランス語が履修可能か調べるためには各学部、各学科に調査票を送るべきだが、そのようにした場合、送付しなければならない調査票の数が膨大になり、また郵送費も膨大になるので、次のような方針を取った。

各大学において、外国語センター、共通教育機構のようなものの所在地がわかる場合にはそこ宛てに発送する。特に私立大学でその規模が非常に大きい大学の場合、また各学部で異なったキャンパスを持っている大学の場合には各大学の各学部事務室宛てに調査票を発送する。他にも複数キャンパスがある大学でそのそれぞれでフランス語が教えられている可能性が排除できない場合には調査票を送付した。

以下のデータではそれぞれの大学が1つの単位として扱われている場合と、上記に記したような諸大学の各学部が1つの単位として扱われている場合が混在している。しかしながら、各機関における外国語履修のあり方が多様化し、外国語履修の様態を決める単位が大学全体である場合もあれば、学部、学科単位である場合もあれば、さらにはコース単位でさえある場合もある現状では、どのレベルの数字を取ってもそれは全体の傾向を正しく反映したものはいないものになる。そのような前提のもとで以下の数字をご覧いただきたい。

なお英語以外の言語が教えられている大学数についても、ホームページによって明らかにされているデータを使って調査をおこなった。まずその数字を示す。

大学数の総体	914 内
フランス語開講大学	501
中国語	546
ドイツ語	515
ハングル	355
スペイン語	204
ロシア語	182
イタリア語	79
ポルトガル語	26
インドネシア語	26
アラビア語	20
タイ語	15

他にベトナム語、フィリッピン語、スワヒリ語、ハンガリー語、ペルシャ語、デンマーク語、スワヒリ語、トルコ語など

中国語の割合がどんどん増えている。大学数ですでにこのような状態だが、それぞれの大学内部でも中国語の割合は大きくなっているのだと思われる。またハングルも大きな勢力になっている。ロシア語はすでにスペイン語に大きく水をあけられている。ほかにはインドネシア語がかなりプレゼンスを大きくしていることが読み取れる。

短大総数	358
フランス語	92
中国語	123
ドイツ語	60
ハングル	60
イタリア語	20
スペイン語	19
ロシア語	8
ポルトガル語	3

他にスワヒリ、アラビア

ここで目立つのはドイツ語が弱く、ハングルと同数なことである。またイタリ

ア語がここではスペイン語と並んでいる。ロシア語は極めて弱い。また他言語はここではほとんど消えてしまう。

高専総数	56
フランス語	10
ドイツ語	43
中国語	29
ハングル	10
ロシア語	3
スペイン語	3
イタリア語	1

ここでは母数が少ないのであまり言うべきことはないが、ドイツ語がまだまだ強いことに驚かされる。フランス語はハングルと同数になっている。

なお、上に示した機関数と調査票を送付した時点での機関数が必ずしも一致しないのは、調査票を送付した時点での調査でわからなかったものがそれ以後判明した場合、また昨年と今年でホームページ記載の内容に違いがある機関が存在したためである。

0-2 調査票を送付した機関数

全体	703
4年制大学（国公立）	111
4年制大学（私立）	500
短大	84
高等専門学校	8

1-1 調査票を返送してくれた機関数

全体	388	
4年制大学（国公立）	72	18.6%
4年制大学（私立）	260	67.0%
短大	52	13.4%
高等専門学校	4	1.0%

以下の調査項目で、全体の数が返送してくれた機関数と必ずしも一致しないのは、当該質問項目への回答を寄せていない調査票が存在するためである。

3-1 専任教員の有無

全体	385	
いる	178	46.2%
いない	207	53.8%

過去のデータと単純には比較できないし、また他外国語の場合の専任兼任比率との比較もできないので、フランス語の専任の数が減っているとこのデータからだけで即断はできないが、多くの高等教育機関で、フランス語の専任を置かないでフランス語教育が行われているということは言える。

4 履修すべき外国語はどのようになっていますか

全体	371	
1. 1か国語のみ必修	71	19.1%
2. 1か国語のみ必修で 第2外国語も履修可能	185	49.9%
3. 2か国語指定必修で英仏	6	1.6%
4. 2か国語選択必修で例えば英仏	43	11.6%
5. 仏語は自由選択科目としてのみ履修可能	69	18.6%
6. 仏語は学部（専門）科目として選択	17	4.6%
7. 仏語を含む複数外国語から1科目	13	3.5%
8. その他	11	3.0%

2の解答でほとんどの学生が第2外国語を履修しているのか、それとも第2外国語は履修する学生が多くはないのかによって、このデータは読み方が変わってくるだろう。しかし1か国語のみ必修、仏語は自由選択科目としてのみ履修可能という回答を合わせると35%を越えるということは、高等教育機関で仏語を含む第2外国語を履修しない学生が相当数に昇っているという点だけ

は確認できる。

5-1 卒業要件として履修が義務付けられている外国語の総単位数はいくつですか（週 1 回 90 分前後の通年授業の単位を 2 単位とする）

全体	367	
1 0 単位	27	7.4%
2 2 単位	44	12.0%
3 3 - 4 単位	90	24.5%
4 5 - 6 単位	54	14.7%
5 7 - 8 単位	92	25.1%
6 9 - 10 単位	30	8.2%
7 11 - 12 単位	33	9.0%
8 13 - 14 単位	8	2.2%
9 15 単位以上	48	13.1%

外国語の履修を 1 年だけで止めている学校はまだ半数にはなっていないが、3 分の 1 は越えている現状だということになるだろうか。

6-1. 卒業要件に含めることができるフランス語は何単位ですか

全体	358	
1. 0 単位	41	11.5%
2. 2 単位	82	22.9%
3. 3 - 4 単位	114	31.8%
4. 5 - 6 単位	44	12.3%
5. 7 - 8 単位	58	16.2%
6. 9 - 10 単位	12	3.4%
7. 11 - 12 単位	13	3.6%
8. 13 - 14 単位	3	0.8%
9. 15 単位以上	22	6.1%

2 単位は週 1 回の授業で 1 年間、4 単位は週 1 回の授業で 2 年間、もしくは週 2 回の授業で 2 年間、8 単位は週 2 回の授業で 2 年間ということになるろう。

7-8 単位以上の大学が全体の 3 割ほどであるのは、フランス語を卒業要件に認める大学でもその倍以上は 2 年間週 2 回の授業は確保できない形になっているということであろう。他方、2 単位、3-4 単の機関が併せて半数以上になっていることから、第 2 外国語としてのフランス語教育は週 2 回で 1 年間で切り上げられるか、週 1 回で 2 年間という形が全体の半分以上ということになっているのだと考えられる。

7-1. フランス語は最大何単位まで履修できますか

全体	366	
1. 0 単位	26	7.1%
2. 2 単位	76	20.8%
3. 3 - 4 単位	104	28.4%
4. 5 - 6 単位	40	10.9%
5. 7 - 8 単位	62	16.9%
6. 9 - 10 単位	17	4.6%
7. 11 - 12 単位	18	4.9
8. 13 - 14 単位	4	1.1%
9. 15 単位以上	12	3.3%
10. 17 単位以上	23	6.3%

前の質問に比べれば全体に単位数が多い方向にシフトしている。卒業要件には含まれないが、自由聴講科目として、やりたい人には学習を保証するという大学がその差の分だけあるということだろうか。

8-1. 英語以外で選択履修できる外国語はどれですか（複数回答可）

全体	381	
1. フランス語	319	83.7%
2. ドイツ語	304	79.8%
3. スペイン語	135	35.4%
4. 中国語	330	86.6%
5. ハンゲル	219	57.5%
6. ロシア語	86	22.6%

7.その他	80	21.0%
-------	----	-------

このデータを見る際には、調査票を送付したのがそもそもフランス語を開講している大学、あるいはフランス語を開講しているか否か不明の大学であることに注意しておかねばならない。それを勘案して見ると、中国語を開講している大学はフランス語を開講している大学よりかなり数が多いということが推測される。朝鮮韓国語もかなりの数で開講されていると考えるべきだろう。上記に記したホームページによる開講調査の結果が示すように、第2外国語として履修されている外国語の順位としては中国語、ドイツ語、フランス語、朝鮮・韓国語、スペイン語の順になる。

9-1. 外国語授業はどのような学期制のもとで実施されていますか

全体	385	
1. セメスター制	317	82.3%
2. 通年制	80	20.8%
3. 3学期制	5	1.3%
4. 集中授業	3	0.8%
5. その他	5	1.3%

4分の3の機関がセメスター制を取っている。外国語教育に関して言うなら、学習を止める区切りが入学してから半年後、1年半後という形も多くありうることになる。またこの形で単位を落とした学生の再履修がどのような形で保障されているかも気がかりなところではある。

10. フランス語授業は週当たり何回ありますか。それぞれ回数をマークしてください。学期とは半期です。

開始学期

全体	340	
1. 1回	142	41.8%
2. 2回	114	33.5%
3. 3回	19	5.6%
4. 4回	33	9.7%

5.5回以上	35	10.3%
6.該当なし	0	0.0%

第2学期

全体	327	
1.1回	128	39.1%
2.2回	99	30.3%
3.3回	21	6.4%
4.4回	39	11.9%
5.5回以上	34	10.4%
6.該当なし	13	4.0%

第3学期

全体	180	
1.1回	69	38.3%
2.2回	51	28.3%
3.3回	12	6.7%
4.4回	8	4.4%
5.5回以上	10	5.6%
6.該当なし	34	18.9%

第4学期

全体	177	
1.1回	67	38.4%
2.2回	46	27.1%
3.3回	9	6.2%
4.4回	7	4.0%
5.5回以上	8	5.6%
6.該当なし	36	20.3%

外国語が履修されている機関でも、1年目だけというところがほぼ半数に近

いことがこのデータからわかる。2年目にも継続して外国語履修をさせている機関では第3学期、第4学期の授業回数に変化はあまりなく、当該機関の学生は2年間外国語学習を続けているところが多いのだと思われる。

11.1 フランス語の授業の他にフランス語フランス文化関連科目が開講されているか。

全体	382	
開講されている	151	39.5%
開講されていない	231	60.5%

フランス語授業の他にフランス語フランス文化関連科目が開講されている機関が相当数に昇っている。その原因はわからないが、言語の授業だけでは、学生の関心をつなぎとめられないという判断なのか、あるいは積極的に語学に文化の授業を加えることでよりトータルな知識を目指したということなのか、この点についてはさらに細かな調査が今後求められるかもしれない。

12-1. フランス語の授業でネイティブ担当の授業があるか

全体	383	
有る	131	34.2%
無い	251	65.5%

ネイティブによる授業が相当数の機関で開講されていることがわかる。ただし、これについては日本の高等機関の外国語教育が会話学校化しつつあるのか、あるいは文法の教育ときちんと噛み合った形で授業が展開され、総合的な力が付けられる方向に向かっているのかについてはさらなる調査が求められるだろう。また他の外国語の教育におけるネイティブ導入と比べてフランス語の場合がどうであるのかという点にも関心が持たれる。

13-1 CALL 教室による授業はフランス語において行われているか

全体	378	
行われている	41	10.8%
行われていない	337	89.2%

CALL はフランス語教育においてはあまり用いられていない現状がはっきりした。これは初習外国語教育と CALL 教室が馴染まないということなのか、あるいはフランス語教員の中で CALL 教室を使いこなせる人間が少ないということなのか、はたまた CALL 教室はほとんど英語教育によって占有されており他外国語が入っていく余地がないのか、さらに調査が望まれる。

14-1. フランス語圏へ語学短期留学制度を学校として行っているか

全体	382	
行っている	57	14.9%
行っていない	325	85.1%

語学短期留学をおこなっている機関は全体の6分の1弱だが、これを多いと見るか少ないと見るかは評価の分かれるところだろう。

15-1 フランス語圏との教育機関との交換留学制度の有無

全体	384	
有る	69	18.0%
無い	315	82.0%

交換留学をおこなっている機関の数は短期留学より若干多くなっている。おそらく両者は重なり合っている部分が多いと思われるが、短期留学がおこなわれていないのに、交換留学のシステムだけがあるという場合、システムが本当に機能して毎年留学生が出ているのか、あるいは実際に留学生が出掛けた場合に効果的な留学ができているのかは関心が持たれるところである。

16 入学試験はフランス語で受験可能か

全体	383	
学校独自の入試	31	8.1%

英語の問題の一部を 仏語に変えて受験可能	3	0.8%
センター試験を活用	85	22.2%
推薦入学制度で英語以外 の外国語として	5	1.3%
フランス語では受験できない	286	74.7%

全体の4分の3はフランス語では受験できない。また大学独自のフランス語入試をおこなっている機関は減りつつあるというのが大方の実感であると思われるが、その点はこのデータによっても確かめられる。一方、センター試験を活用する大学は思いのほか多い。ただし、これは一応それができていることになっているというだけなのか、それとも実際にセンター試験のフランス語入試を受験して入学してくる学生が相当数いるのかについてはなお調査が必要だろう。英語の一部を他の外国語に変えての受験という形は、広まっていない。高校において英語以外の外国語教育が広がりを見せる一方、その外国語教育が受験レベルにはなかなか達していない現状を考えると、英語以外の外国語をわずかでも学んだ生徒への熱意に応える方策として、この形はもっと広まってもいいものだろう。

18-1 フランス語の教員免許を取得できるか

全体	385	
できる	19	4.9%
できない	365	94.8%

フランス語の教員免許を取得できる大学は、仏文科、フランス語科、フランス科などを専門としている機関のみでその数は多くはない。

2. 大学教員向けアンケートの結果

アンケート結果に関しては、本調査が SJLLF・SJDF 両学会員を対象にしたものであり、実際のフランス語教育の現場での教員構成比（例えば若手教員、あるいは外国人教員などの比率）とのズレが予想される点など、必ずしも実態をそのまま反映していない可能性に留意してお読みいただきたい。

教員対象アンケートに関しては、機関対象、学生対象アンケート結果と対照すると、より立体的な理解が可能になる。

* 教員対象調査票の送付・回答とデータに関して

SJLLF：送付数 会員 1432 名から 25%相当として機械的に選び出した 358 件
回収数 150 件；回収率 42%

SJDF：送付数 アンケートとしては会員全員宛送付しているが、教員対象調査の対象としたものは、SJLLFにあわせ 25%相当として 153 件
回収数 52 件；回収率 34%

また処理の過程で、統計作業が膨大になることから、さらに一定数のものをデータ処理の対象からは外している。

1. 1. 学会への加入についてお教えてください。

	全体	189	
1	日本フランス語フランス文学会員	140	74.1%
2	日本フランス語教育学会員	11	5.8%
3	両学会ともに会員	37	19.6%
4	どちらも会員でない	1	0.5%

「両学会ともに会員」の数を含めても、教育学会員の回答数は全体の 4 分の 1 程度である。残りは日本フランス語フランス文学のみ会員で、所属学会の違いがフランス語教育や教育法に対する関心の度合い、意識の違いをそのまま反映するものではないとはいえ、この差を踏まえて以下の質問項目の回答を読む必要がある。

2-1. 1. 母語についてお教えてください

	全体	189	
--	----	-----	--

1	日本語	181	95.8%
2	フランス語	5	2.6%
3	日本語・フランス語以外	3	1.6%

フランス語を母語とするものは2.6%である。50人の教員のうち1人か2人という数字が実態を反映しているのかどうか。これについてはネイティブの回答率が低い、あるいは両学会への加盟率がそもそも低いという要因も考えられる。仮にこの数字が実態を反映しているとすればネイティブ教員の数は過少であろう[「機関アンケート12-1」によれば、「フランス語の授業でネイティブ担当の授業がある」機関は34.2%である]。

3. 年齢は次のうちどれですか

	全体	189	
1	20代	0	0.0%
2	30代	37	19.6%
3	40代	58	30.7%
4	50代	61	32.3%
5	60代	28	14.8%
6	70以上	5	2.6%

40代30.7%、50代32.3%に対して20代は0%、30代は19.6%で有意に少ない。新任の教員数自体が減少している、あるいは、総数は変わらないが教職のキャリアを開始する年齢が遅くなっているのではないか。次の質問項目で、教員になって5年未満の層は、他の年代に比べて一番少ないものの、それほど大きい差があるわけではないので、現時点では後者と考えるのが良いだろう。その結果として、以前に比べて教員全体の平均年齢が上昇していることも考えられる。もっとも、学会加入率の偏りの問題はここでも考慮する必要がある。

4. フランス語教員になって何年になりますか			
	全体	189	
1	5年未満	24	12.7%
2	5年～10年	28	14.8%
3	11年～15年	35	18.5%

4	16年～20年	26	13.8%
5	21年～25年	31	16.4%
6	26年～30年	18	9.5%
7	31年以上	27	14.3%

1～5まで概ね15%前後で極端な差はみえない。これは開始したキャリアを途中で停止することが少ないことを示しているだろう。ただし、最大の3(18.5%)と最小の1(12.7%)の間には約5%の差が見られる。3が最大になる理由は不明だが、1が最小なのは、ここ5年間に教職についてのものがそれ以前に比べて少ないことを示しており、教員ポストの減少を表しているのかもしれないが、次に少ない4との間には回答数で2の違いしかないので、それほど有意の差ということとはできない。

5-1. フランス語圏での生活経験がおありですか

	全体	189	
1	ある	179	94.7%
2	ない	10	5.3%

ほとんどの教員がフランス語圏での生活経験を持っている(94.7%)

6-1. 主たる専攻分野は何ですか(複数回答可)			
	全体	189	
1	フランス文学	151	79.9%
2	フランス語学	23	12.2%
3	フランス語教育法	24	12.7%
4	フランス文化・事情	28	14.8%
5	地域研究	6	3.2%
6	異文化コミュニケーション	4	2.1%
7	言語学	13	6.9%
8	フランス語以外の外国語	2	1.1%
9	哲学・思想	20	10.6%
10	その他の文系分野	10	5.3%
11	理工系分野	2	1.1%

12	その他	9	4.8%
----	-----	---	------

のべ回答数は 292（平均回答数 1.54）であるから、3つ以上の分野を選択したものは少ないと思われる。

フランス語学とフランス文学をあわせると 92.1%に達する。他に「フランス語教育法」と「哲学・思想」を加えれば 100%を越える。アンケート対象が両学会員であることを考えれば当然の結果だが、逆に上記 4 分野以外を選択した回答は合計で約 4 分の 1（24.5%）ほどあり、専攻分野の広がりや一定程度示している。とはいえ「フランス文化・事情」や「異文化コミュニケーション」あるいは社会・自然科学に属する専攻分野出身で、文学語学思想、あるいは教育法以外を専門とするものが、現在の大学等でのフランス語教育現場でどれくらいの比率を占めているのかの実情を確定するには、学会員以外からの回答も必要であろう。またフランス語教育法が専門との回答は 1 割強（12.7%）で、アンケート全体の傾向を読む際に注意すべき点であろう。ちなみにこの回答は質問 1 で尋ねた教育学会所属者の半分に過ぎない。

7. 勤務形態は次のうちどれですか。			
	全体	189	
1	非常勤のみ	63	33.3%
2	常勤で非常勤をも兼務	51	27.0%
3	常勤のみ	69	36.5%
4	現在は教えていない	4	2.1%
5	その他	2	1.1%

非常勤のみの形態がちょうど 3 分の 1（33.3%）を占め、兼務を加えると 6 割に達する。語学教育における非常勤教員の存在の大きさが推し量れるが、それでも常勤のみとの回答も 36.5%あり、回答者に偏りがなく現実の状況を反映しているのか気になるところである[各機関における専任教員の有無に関しては「機関アンケート 3-1」参照]。

あるいは「常勤」の中にも「任期のある特任教員」など従来とは違う様々なカテゴリーが存在するようになっており、この辺りの実情把握も今後求められるところであろう。

8. 主たる勤務校（常勤・非常勤を問いません）は次のどれですか。 （複数回答可）

	全体	189	
1	4年制大学	168	88.9%
2	短期大学	10	5.3%
3	高専	1	0.5%
4	高校	8	4.2%
5	その他	14	7.4%

これもアンケート対象を考えれば当然の結果か。高校・その他を併せて 11.6% の回答があるが、学会員を対象とするかぎり、大学を主たる勤務先にする教員を対象とするアンケートになると考えてよいだろう。したがって教育の対象は概ね 20 歳前後の学生で、社会人や若年・高齢層はあまり含まれていない等、フランス語教育の全体から見れば限定的な調査であることを意識しておく必要があるだろう。

9. 非常勤先を含めた週の持ちコマ総数はいくつですか			
	全体	185	
1	2コマ以下	16	8.6%
2	3～4コマ	14	7.6%
3	5～6コマ	55	29.7%
4	7～8コマ	61	33.0%
5	9～10コマ	21	11.4%
6	11～12コマ	7	3.8%
7	13～14コマ	8	4.3%
8	15コマ以上	3	1.6%
9	現在はない	0	0.0%

3と4の回答が突出しており、あわせて（5-8コマ）62.7%、9-10コマとの回答が 11.4%ある。5-8コマは勤務形態としては常勤（兼務を含む）教員がもっとも多く含まれるであろう部分で、質問7と概ね合致する。また人数にコマ数を掛ける（たとえば4-5コマであれば4.5で計算する）と、9コマ以上担当する教員の比率（計 21.1%）は、総コマ数に対する担当コマ数の割合では 34.3%に上昇する[21.1%の教員が 34.3%の授業を担当している]。この部分が非常勤教員の占める割合と合致するとすれば、またアンケート回答者に占める常勤教

員の割合が実際の常勤教員の割合より大きいと考えれば、ここでも語学教育において非常勤教員の役割が大きいことが推測できる。

10. そのうちフランス語科目はどのくらいの比率で担当されていますか			
	全体	183	
1	すべて	67	36.6%
2	80－90%	33	18.0%
3	3分の2	26	14.2%
4	半分くらい	23	12.6%
5	3分の1	15	8.2%
6	20%以下	19	10.4%

3分の2までの合計で68.8%。自身の専攻分野に関わらず約7割の教員が主としてフランス語科目を担当しているといえる。アンケート回答者については、全体としてフランス語科目の教育担当者が中心を占めているとあって良い。

12-1. 担当されているフランス語の授業形態はどのようなものですか（複数回答可）			
	全体	187	
1	文法説明中心	85	45.5%
2	文法＋会話表現	122	65.2%
3	講読	83	44.4%
4	会話表現中心	31	16.6%
5	作文（和文仏訳）	19	10.2%
6	時事フランス語	6	3.2%
7	いずれの要素をも含む総合的なもの	25	13.4%
8	その他	42	22.5%

もっとも数の多い回答は2で65.2%を占め、1つのクラスに複合的な目的をもたせたものが過半数を大きく超えている。これは週1コマだけの履修を想定したものとも考えられよう。一方で1と3がほぼ同数で45%程度に達し、これ

は2つのクラスを同時に履修することを課す、あるいは可能にするクラス編成がまだ健在であることの証とも思える。[フランス語の1週あたりの授業数については「大学機関アンケート 質問10」、その他単位数等の質問項目も参照のこと]

内容的には2が会話と文法を含むものであるのに対し、4の文法がなく会話表現中心のものは16.6%にとどまっている。文法的内容が重視されているといえるだろう。また4に対して3が二倍以上の数値を示していることは、文法との組み合わせとして会話より講読が現在でも一般的である状況を反映しているのかもしれないが、2には講読がふくまれていないので、この部分を合わせると、全体としては「会話」と「講読」はほぼ拮抗しているとみることもできそうである。上に述べたように、週当たりのコマ数（つまりフランス語にどれだけ時間をかけられるか）を、併せて考慮する必要があるだろう [学生側の意識に関しては「学生受講生アンケート」参照のこと。たとえば、「質問17.あなたはフランス語を学習してどのような方面の能力を身につけたいと思っていますか。」「18.現在受けている授業を基礎にして、将来あなたが望む能力は得られると思いますか」「19-1.あなたが好ましいと思うのは、どんな授業形態でしょうか」]。

1～6の範疇に入らない「総合的な内容」は13.4%と一定の割合を占めているものの少数派であるので、少なくとも「第2外国語」としては、「伝統的」な区分けや教育方法が一般的であるのだろう。また22.5%とかなり多くの回答のある「その他」の内容が気になるところで、今後の調査課題といえる。

13-1. 現在、授業ではどのような教材、機器や設備を利用していますか (複数回答可)			
	全体	187	
1	日本で出版された教科書	167	89.3%
2	外国で出版された教科書	56	29.9%
3	練習帳など市販の副教材	22	11.8%
4	一般の書籍・参考書	34	18.2%
5	自作の教材や補助教材	77	41.2%
6	録音教材やCD	105	56.1%
7	ビデオや映画	88	47.1%
8	スライドやOHP	12	6.4%

9	在来のLL教室	13	7.0%
10	コンピューターやインターネット	40	21.4%
11	その他	12	6.4%

回答総数は626で1人平均3.35、3項目から4項目に印をつけた計算である。これは担当クラス毎に違ったタイプの教材を使うという可能性や、教科書と副教材、ビデオや映画のように一つのクラスで複数の教材を使うことを反映しているのであろう。教科書のみで授業を行う例は少数派のようだ。

教科書については日本で出版された教科書を使用する率が89.3%と圧倒的で、外国で出版された教科書の利用が29.9%、自作の教材や補助教材の利用が41.2%と一定の割合を占めているが、「日本で出版された教科書を使用しない」のは少数であると考えられる。大学等では日本で出版された教科書を中心に授業が行なわれるのが一般的であるといえる。また近年各大学でCALL教室などの設備が充実してきているはずであるが、コンピューターやインターネットを使った授業は21.4%と一定の位置を確保しているとはいえまだ少数派のようで、在来のLL教室の利用を合わせても3割弱であり、(AV機器を備えたものも含む)通常教室での授業が一般的らしい[「機関アンケート」によれば、「CALL教室による授業がフランス語において行われている」機関は10.8%である]。

14-1. 日本のフランス語教科書についてどうお考えですか。(複数回答可)			
	全体	188	
1	ほぼ満足している	65	34.6%
2	やさしく幼稚過ぎる	29	15.4%
3	難しく高尚過ぎる	6	3.2%
4	内容が簡略的過ぎる	44	23.4%
5	網羅的で詳細に過ぎる	13	6.9%
6	説明の仕方が不十分	30	16.0%
7	例文の素材や文体が初心者向きでない	17	9.0%
8	例文に誤りが多い	6	3.2%
9	練習問題に無意味・不適切なものが多い	27	14.4%
10	練習問題の量が少ない	59	31.4%
11	内容が文学的素材に偏っている	1	0.5%
12	内容が会話的素材に偏っている	24	12.8%

13	作文が足りない	23	12.2%
14	言語運用能力を習得させるのに適切でない	22	11.7%
15	制作意図が判然としない	20	10.6%
16	その他	24	12.8%

ほぼ満足しているのは3分の1程度（34.6%）で、不満の理由は2、4を合わせて38.8%、逆に3、5は合わせても10.1%で、教科書の内容が簡単すぎるという理由が、その逆の4倍にもなっている。また練習問題の不足31.4%、作文の不足12.2%と、量の不足も不満の原因となっている。全体として近年の教科書が薄く、易しくなっているとの認識と批判がよみとれる。素材に関しては「文学的すぎる」0.5%に対して「会話に偏っている」が12.8%で、不満の大きな原因と捉えるべき数値ではないが、「読解」と「会話」を比較すれば前者を重視する意識が強いことがうかがわれる。また教科書の目指す全体的な目的、方向性については14が11.7%と、それほど大きな数値ではないが、15の10.6%を合わせれば2割程度に達し、全体として、現在の学生の（あるいは大学等の資源の制約の）最大公約数に合わせた教科書ではなく、それぞれの教育目標に合わせた多様なスタイルの教科書が望まれているようである[教科書あるいは授業内容・レベルに関する学生側の意識は教員とは逆に、総じて「難しすぎる」というものである。また素材に関しては、文学購読よりも日常的な自己表現のための教材が求められる傾向にある。詳しくは「学生受講生アンケート14・15など」参照のこと]。

15. 1年次における初級文法で年度内に学習させる動詞の時制は通常次のどれですか（学習する時制のすべてに○をつけてください）			
	全体	183	
1	直説法現在	182	99.5%
2	直説法複合過去	175	95.6%
3	直説法半過去	145	79.2%
4	直説法大過去	86	47.0%
5	直説法単純未来	136	74.3%
6	直説法前未来	65	35.5%
7	条件法現在	94	51.4%
8	条件法過去	62	33.9%
9	接続法現在	79	43.2%

10	接続法過去	45	24.6%
11	命令法	143	78.1%
12	直説法単純過去	32	17.5%
13	直説法前過去	17	9.3%
14	接続法半過去	10	5.5%
15	接続法大過去	9	4.9%
16	条件法過去第二形	9	4.9%

ほぼすべての授業で学習させる時制は 1 と 2 (95%以上)。3 と 5 と 11 とで 7 - 8 割で、それ以外では半数程度以下に落ちる。一方、すべての時制を 1 年次に学習させるのは 5%に過ぎないが、半数程度の授業ですべての「法」が学習範囲に入っている。直接法については単純過去の学習比率が 17.5%にとどまっているのが目を引く。またそれぞれの法・時制で、複合形の学習比率が下がる傾向がみてとれる。「1 年次」という限定つきなので、2 年次以降の必修でさらに前に進むことがプログラムされているのかもしれないが、次の質問項目と併せて考えると、内容が限定的で必要最小限に絞られる傾向を示しているようにも読める。

16-1. 第二外国語としてのフランス語の教育目標をどの辺に想定していますか。(2 つまで○をつけてください)			
	全体	187	
1	教養としてフランス語の基本的な知識を持つ	133	71.1%
2	旅行に役立つ程度の能力	71	38.0%
3	フランス語圏で基本的な生活ができる程度の能力	22	11.8%
4	辞書を使って、新聞、雑誌や文献を読むための基礎的な能力	88	47.1%
5	フランス語圏の大学に留学ができる程度の能力	7	3.7%
6	フランス語を使って私的な交流ができる程度の能力	19	10.2%
7	ある程度ビジネスや仕事で使えるくらいの能力	0	0.0%
8	その他	10	5.3%

1 が突出しており、71.1%を占めている。次いでが 38.0%、4 が 47.1%で、両者を合計すると 85.1%になり、2 つまで○という設問なので、この辺りが現在の第二外国語としてのフランス語教育の目標の共通の基盤と見なして良いのではないかと(1+2あるいは1+3が最多で対照的、次いで2+3の組み合わせと読めるのではないかと)。ここでは、基礎入門的な「会話」と「読解」が拮抗して

いるが、やはり前者がやや優位である。[学生側の意識に関しては「大学受講生アンケート 17.あなたはフランス語を学習してどのような方面の能力を身につけたいと思っていますか。(複数回答可)」において、「簡単な日常会話が話せるようになりたい」(53.5%)「フランス語でコミュニケーションがとれるようになりたい」(43.0%)「旅行の際に役立てたい」(41.5%)、さらに、「手紙や簡単な文章が書けるようになりたい」(23.8%)を加えて、「聞く」「話す」「書く」能力を合わせた日常かつ平易な自己表現力が期待されている一方、「新聞・雑誌や簡単な読み物が読めるようになりたい」(29.3%)、「専門書や文学作品を読む基礎学力をつけたい」(20.8%)を合わせた読解力の獲得については、合計で約半数の支持を受けているとはいえ、前者をかなり下回っている。また「教養としてフランス語の基本的な知識を持ちたい」との回答は26.0%にとどまっており、教員アンケート(回答1。71.1%)と対照的な結果がでている。学生は抽象的な「教育目標」を期待していないとも読めるところである]。全体として、学生、教員ともに「入門」「基礎」なレベルを目標とする点で共通し、「会話」「読解」のどちらを重視するかという点に差異が表れているが、学生にしても「読む力」を望んでいないということではなく、その意味では学生・教員は目標を共有しているといえよう。

17. 教授法に関する課程や研修会(スタージュなどに)参加した経験をお持ちですか。			
	全体	188	
1	大学で教職課程を履修した	51	27.1%
2	大学院などで教授法関係の授業を履修した	26	13.8%
3	教授法研修会に参加した	79	42.0%
4	ペカ、ランコントロール、ジュールネ・ペダゴジックなどの自主的な教授法研究会に参加した	64	34.0%
5	関心はあるが研修会に参加したことはない	46	24.5%
6	関心はない	17	9.0%

未経験者は5と6の合計で33.5%、ほぼ3分の1であり、何らかの教授法の講習を経験したものが多数を占めている。5を含めて教授法に対する必要性の認識、関心の高さは明らかであろう

18-1-1. 各種検定試験についてご存知ですか。 仏検			
	全体	189	
1	知っている	188	99.5%
2	知らない	1	0.5%

18-1-2. DELF/DALF			
	全体	189	
1	知っている	181	95.8%
2	知らない	8	4.2%

18-1-3. TCF			
	全体	189	
1	知っている	94	49.7%
2	知らない	95	50.3%

18-2-1. 各種検定試験の受験を学校として推進していますか。仏検			
	全体	189	
1	学生に勧めている	149	78.8%
2	とくに勧めていない	40	21.2%

18-2-2. DELF/DALF			
	全体	189	
1	学生に勧めている	43	22.8%
2	とくに勧めていない	146	77.2%

18-2-3. TCF			

	全体	189	
1	学生に勧めている	11	5.8%
2	とくに勧めていない	178	94.2%

18-3-1. 学生たちはそれらの試験を受験していますか。仏検			
	全体	189	
1	受験している学生がいる	165	87.3%
2	知らない	24	12.7%

18-3-2. DELF/DALF			
	全体	189	
1	受験している学生がいる	55	29.1%
2	知らない	134	70.9%

18-3-3. TCF			
	全体	189	
1	受験している学生がいる	9	4.8%
2	知らない	180	95.2%

18. 各種試験で単位認定・成績評価に加味されているものはありますか			
	全体	189	
1	仏検	60	31.7%
2	DELF/DALF	0	0.0%
3	TCF	0	0.0%
4	なし	120	63.5%

仏検の認知度は高く、多くの教員が学生に勧めている。DELF/DALF に関しては

認知度は高いが勧めてはいない。TCF に関しては半数が知らないという、好対照的な結果がでている。DELF/DALF も仏検も、勧めている割合より受験している学生を知っている割合が高いという、面白い結果がでている。教員より学生の方が検定に対する関心が高いのかもしれない。検定の中ではやはり仏検の認知度、受験度が圧倒的なようである。

19-1. フランス語教育が抱えている困難で大きな要因は何だとお考えですか。 (複数回答可)			
	全体	187	
1	授業時間が不足している	81	43.3%
2	学生のモチベーションが低い	96	51.3%
3	英語偏重の考え方が蔓延している	98	52.4%
4	フランス語教育の意味が理解されていない	61	32.6%
5	何を教えるかのコンセンサスが確立されていない	40	21.4%
6	日本人が外国に興味を失っている	46	24.6%
7	他の外国語に押されている	62	33.2%
8	その他	23	12.3%

その他が 12.3%なので、困難の要因は質問者の想定範囲内にほぼ網羅され、かつ全ての要因に一定の賛意が示されている（最小で 21.4%）。「英語偏重」が 52.4%で最大で、英語以外でも他の外国語に押されているとの認識も約 3分の 1 の教員に共有されている[大学等で開講されている外国語の状況に関しては「機関アンケート」参照のこと]。根本的には、何故フランス語を知らなければならないか分からないというフランス語の地位低下が最大の要因で、それが「フランス語教育の意味が理解されていない」(32.6%) という嘆きにつながり、結果として「学生のモチベーションが低い」(51.3%で最大) ことや、「授業時間の不足」(43.3%) を招くことになるのではないか[学生側の意識に関しては「大学受講生アンケート」参照のこと。たとえば質問 11「あなたはフランス語の学習にどの程度興味を感じますか」への回答は、「とても感じる」(18.5%)と「わりと感じる」(35.0%)を合わせて 53.5%にとどまっている]。全体として外的要因（教える側以外の要因）をあげるものがほとんどを占め、その中で、「何を教えるかのコンセンサスが確立されていない」という回答は、教える側の問題点の指摘として重要であろう（21.4%）。

3. 大学生向けアンケートの結果

おおむね初級フランス語の大学受講生とした。中級や上級も含めると、極めて多様で煩瑣になるため統計的な意味がないと予想されたため。

1) SJLLF :

送付数 調査可能対象会員 1432 名から 25%相当として機械的に選び出した 358 件からさらにその 25%相当として機械的に選び出した 89 名(実際は 88 名に送付)に大学受講生向けの質問票(約 30 部)の配布と回収を依頼した。

回収数 36 件 ; 回収率 40.9%

2) SJDF :

送付数 調査可能対象会員数 612 名の 25%に相当する 153 名からさらにその 25%相当として機械的に選び出した 38 名(実際は 39 名に送付) 39 名に大学受講生向けの質問票(約 30 部)の配布と回収を依頼した。

回収数 18 件 ; 回収率 46.2%

3) SJLLF+ SJDF :

合計 $36/88+18/38=54/126$ が回収され(回収率 42.9%)、同封の調査可能対象大学受講生の有効回答票は、1331 件であった。

有効回答票 1331 件

・大学生のアンケート結果とコメント

1. あなたが在籍する学校は、次のうちどれですか。

	全体	1331	
1	国公立大学	439	33.0%
2	私立大学	848	63.7%
3	短期大学	43	3.2%

私立が 63.7%が多い。国立大学は 33.0%である。フランス語教育の主力は私立大学が担っていると言える。

2. あなたの性別は、次のどちらですか。

	全体	1331	
1	男	492	37.0%
2	女	839	63.0%

男子が 37.0%で 4 割近く受講している。女子は 63.0%で過半数ではあるが、圧

倒的に多いわけではない。

3. あなたが在籍する学部・学科は、次の系統のどれに属しますか。

	全体	1326	
1	人文科学系	395	29.8%
2	社会科学系	233	17.6%
3	自然科学系	125	9.4%
4	教育・教員養成系	55	4.1%
5	医学・歯学系	39	2.9%
6	外国語系	206	15.5%
7	一般教養系	44	3.3%
8	体育系	1	0.1%
9	芸術系	37	2.8%
10	家政学・生活科学系	38	2.9%
11	その他	152	11.5%

理系（自然科学系 9.4%＋医学・歯学系 2.9%）の受講生は 12.3%で少ない。人文科学系 29.8%、外国語系 15.5%、芸術系 2.8%は、合わせると 48.1%で、やはりフランス語志向が強い。その他は、新分野の学科やコースを指していて、11.5%の受講生がいることは、心強い。

4. あなたは高校時代英語が好きでしたか、嫌いでしたか。

	全体	1329	
1	とても好きだった	257	19.3%
2	わりと好きだった	505	38.0%
3	別に好きでも嫌いでもなかった	242	18.2%
4	どちらかという嫌いだった	209	15.7%
5	大嫌いだった	116	8.7%

英語好きが「とても好きだった」の 19.3%と「わりと好きだった」の 38.0%を合わせると 57.3%になる。語学好きか欧米志向が比較的多いを見るべきか。英語嫌いは、「どちらかという嫌いだった」(15.7%)と「大嫌いだった」(8.7%)を合わせると、24.4%である。英語嫌いが外国語嫌いにならない授業が期待されているとも言える。

5. あなたが大学入学前に履修したかった第二外国語は何ですか。(複数回答可)

	全体	1328	
--	----	------	--

1	アラビア語	16	1.2%
2	イタリア語	149	11.2%
3	英語	100	7.5%
4	スペイン語	99	7.5%
5	中国語	114	8.6%
6	韓国朝鮮語	52	3.9%
7	ドイツ語	66	5.0%
8	フランス語	739	55.6%
9	ポルトガル語	10	0.8%
10	ロシア語	14	1.1%
11	その他	51	3.8%

複数回答可で、全体合計が 106.2%なので、回答者は平均 1.1 項目を選んでいる。入学前からフランス語志望は 55.6%で多い。おおむね希望通りの外国語が履修できている。しかし、4 割強の学生が他言語を希望していながら受講できずにフランス語受講をしていることになる。時間割の不都合や受講調整等のためであれば、かなり深刻な事態が進行している。

6. あなたが現実に履修できる第二外国語は何ですか。(選択できるすべてに○をつけてください)

	全体	1327	
1	アラビア語	54	4.1%
2	イタリア語	213	16.1%
3	英語	517	39.0%
4	スペイン語	432	32.6%
5	中国語	836	63.0%
6	韓国朝鮮語	509	38.4%
7	ドイツ語	842	63.5%
8	フランス語	1210	91.2%
9	ポルトガル語	40	3.0%
10	ロシア語	312	23.5%
11	その他	40	3.0%

質問 5 は入学前の志望言語の割合に対して、質問 6 の実際はほとんどの主要外国語が受講できることが分かる。各大学等は第二外国語を、多い順で並べると、フランス語、ドイツ語、中国語、英語、スペイン語等の順で開講している。第二

外国語としてフランス語が受講できる割合が 91.2%ということは、8.8%の受講生が第二外国語ではなく、第一外国語（あるいはまれながら、第三外国語としての）フランス語受講ということになる。英語が第二外国語 39.0%というのは、第一外国語を英語以外とするところが多いことになる。

7. その中であなたがフランス語を選択した理由は何ですか。（複数回答可）

	全体	1326	
1	フランス語圏（の何か）に関心がある	691	52.1%
2	国際公用語である	202	15.2%
3	自分の将来に役に立つと思う	219	16.5%
4	以前やったことがある	65	4.9%
5	何となくカッコいい	497	37.5%
6	親、先輩、友人、先生などに勧められた	115	8.7%
7	時間割の都合で	44	3.3%
8	履修指導で半ば強制的に	78	5.9%
9	特に理由はない	86	6.5%
10	その他	80	6.0%

複数回答可で、回答者は平均 1.61 項目を選んでいる。「フランス語圏（の何か）に関心がある」の 52.1%は多いとは言えない。「なんとなくカッコいい」37.5%は喜ぶべき割合だろうか。近い将来こうした雰囲気を作る風潮がなくなったときに、フランス語受講者が劇的に減少する兆候である。確信的フランス語受講者（「国際公用語だから」の 15.2%、「自分の将来に役に立つと思う」の 16.5%）はそれほど多くない。「親、先輩、友人、先生などに勧められた」の 8.7%は多くはない。「履修指導で半ば強制的に」の 5.9%や「時間割の都合」の 3.3%は喜べない数字だ。「以前やったことがある」4.9%は、無視できない数字だ。既習者がクラスに数名はいることになる。彼らがクラスのリーダーシップをとるときは、授業の活性化につながる。

8. あなたは過去にフランス語を学習した経験がありますか。

	全体	1331	
1	はい	116	8.7%
2	いいえ	1215	91.3%

「はい」が 8.7%だが、7の「以前やったことがある」の 5.4%とは一致しない。その差 3.3%は何を意味するのだろうか。「過去にフランス語を学習した経験が」

あるが、大学でフランス語受講を決めた理由はそれ以外にあったことを示すのだろうか。

9. (問 8 で 1 と答えた人に)それはどのような形ですか。(複数回答可)

	全体	116	
1	小学校の授業で	11	9.5%
2	中学校の授業で	17	14.7%
3	高校の授業で	61	52.6%
4	ラジオ・テレビで	20	17.2%
5	海外の学校で	15	12.9%
6	その他	22	19.0%

回答者は平均 1.3 項目を選んでいる。つまり、複数の施設やメディアですでにフランス語学習の経験がある。小学校(9.5%)、中学校(14.7%)、高校(52.6%)や海外の学校(12.9%)でのフランス語受講の経験から継続して大学等でフランス語受講していることの意味は小さくない。また、「ラジオ・テレビで」のフランス語学習経験(17.2%)も継続学習の重要な動機付けになっている。ところで、問題は大学のカリキュラムで、既習者への対応が十分できているのかどうかである。

10. 1 回の授業時間の長さをどう思いますか。

	全体	1319	
1	長すぎる	260	19.7%
2	適当である	1037	78.6%
3	短すぎる	22	1.7%

「適当である」が 78.6%なので、大多数の受講生が現行の授業時間に適応している。しかし、「長すぎる」が 19.7%もいるのは、無視できない数字だろう。落ちこぼれやクラス崩壊の原因になりうる割合でもある。この数は授業の工夫次第で少なくできるだろうか。

11. あなたはフランス語の学習にどの程度興味を感じますか。

	全体	1329	
1	とても感じる	263	19.8%
2	わりと感じる	483	36.3%
3	いくらか感じる	423	31.8%
4	ほとんど感じない	125	9.4%
5	まったく感じない	35	2.6%

「とても感じる」の 19.8%と「わりと感じる」の 36.3%を合わせて、56.1%は決してよい数字ではない。「いくらか感じる」の 31.8%を加えて初めて、87.9%と

いう安心できる数字になる。「いくらか感じる」はやはり積極的な態度ではない。「ほとんど感じない」の 9.4%「まったく感じない」の 2.6%の合計が 12.0%なので、授業自体に少しでも興味を失ったときは、「いくらか感じる」の中味次第で授業崩壊が起きるだろう。この数字は後期も押し迫った時期のアンケート結果の数字であり、授業放棄した受講生は含まれていないからだ。この 12.0%は、質問 7 の「親、先輩、友人、先生などに勧められた」という回答を減らす要因になりうる。

12.(問 11 で 1 か 2 か 3 と答えた人に)興味を感じるのはどんな点ですか。(複数回答可)

	全体	1170	
1	音の響きや言葉のリズム	481	41.1%
2	文の構造	206	17.6%
3	教材の内容	72	6.2%
4	授業の方法	109	9.3%
5	検定試験などの資格	117	10.0%
6	フランス語圏の生活文化情報	659	56.3%
7	もともとフランスやフランス語が好き	317	27.1%
8	その他	32	2.7%
9	該当なし	1	0.1%

回答者は平均 1.7 項目を選んでいる。「フランス語圏の生活文化情報」への関心が 56.3%でやはり高い。フランス語そのものへの関心(「音の響きや言葉のリズム」の 41.1%「文の構造」の 17.6%)が比較的高い。「もともとフランスやフランス語が好き」の 27.1%も小さくない数字だ。しかしながら、「授業の方法」(9.3%)や「教材の内容」(6.2%)への関心はそれほど高くはない。現に受けている授業の方法や使用中の教科書は織り込み済みなので、数字に反映していないと見るべきだろうか。「検定試験などの資格」が 10.0%であるのは、大学での評価に加えて、一般的客観的評価も望む受講生の割合である。

13.(問 11 で 4 か 5 答えた人に)興味を感じないとしたらその理由はどこにあると思いますか。(複数回答可)

	全体	208	
1	勉強の負担が重い	90	43.3%
2	発音が好きではない	42	20.2%

3	文法などが面倒	112	53.8%
4	教材に興味を感じない	31	14.9%
5	授業方法が合わない	34	16.3%
6	教員に好感が持てない	27	13.0%
7	フランス語やフランス語圏に興味を持てない	21	10.1%
8	外国に興味がない	13	6.3%
9	その他	15	7.2%
10	該当なし	2	1.0%

回答者は平均 1.9 項目を選択している。「文法などが面倒」の 53.8%、「発音が好きではない」の 20.2%などはフランス語そのものに関わるもののため深刻な数字である。そして、「勉強の負担が重い」が 43.3%もあることはさらに深刻である。他方、フランス語の特性を納得させ困難を克服させる役割を担うべき授業や教材およびそれらを引き受ける教員に対する評価が、それぞれ「授業方法が合わない」の 16.3%、「教材に興味を感じない」の 14.9%、「教員に好感が持てない」の 13.0%となり、やはり深刻であろう。近年日本でつくられたフランス語教材はやさしくなり、覚える量もかなり減っているにもかかわらずの回答である（教員アンケート質問 14 では、日本で作られたフランス語教科書について、「やさしく幼稚である」(15.4%)、「内容が簡单的過ぎる」(23.4%)、「練習問題の量が少ない」(31.4%)となっているので、教員と受講生との意識のギャップが浮き彫りになった)。そして、「フランス語やフランス語圏に興味を持てない」(10.1%)、「外国に興味がない」(6.3%)という受講生が少なからずいる。授業運営が困難を極めていることが分かる。「フランス語やフランス語圏に興味を持てない」(10.1%)の方は第二外国語が選択必修で、第一希望言語が選択できなかったことが主たる原因だろう。しかし、「外国に興味がない」の 6.3%は、大学そのものの在り方が問われている数字だろう。

14. フランス語を難しく感じますか、やさしく感じますか。

	全体	1330	
1	とても難しい	423	31.8%
2	難しい	702	52.8%
3	どちらでもない	181	13.6%
4	やさしい	22	1.7%
5	とてもやさしい	2	0.2%

「とても難しい」の 31.8%と「難しい」52.8%が合わせて、84.6%という回答は、

ほとんどの受講生がフランス語の難しさを感じているに等しい。教材選定と授業運営の難しさが推測されるが、84.6%という数字は深刻であろう。

15. 問 14 のような感想を抱いた主な理由や原因はどこにあると思いますか。(複数回答可)

	全体	1320	
1	教材	144	10.9%
2	授業の方法	155	11.7%
3	フランス語の文法や構造	1072	81.2%
4	教員	106	8.0%
5	授業内容	155	11.7%
6	自分の努力の反映	370	28.0%
7	フランス語を使った実体験	98	7.4%
8	その他 (62	4.7%

回答者は平均 1.6 項目を選択している。まずは「フランス語の文法や構造」(81.2%)であるという回答は、英語の文法や構造と比べての回答だろう。そして、「自分の努力の反映」つまり努力不足のためとする回答は、28.0%で、努力すれば、難しさが克服できると見なしている。しかし、「教材」の 10.9%、「授業の方法」の 11.7%、「授業内容」の 11.7%、「教員」の 8.0%という授業運営に関わる回答の数字がかなりあることは、授業運営次第で、フランス語学習が「とても難しい」「難しい」という印象を変えられると解釈できる。「フランス語を使った実体験」がないとする回答が 7.4%という数字は意外と少ない。ネイティブの授業や留学の必要性を感じる潜在的な数字なので、このままでは留学希望の減少に繋がるだろう。

16. どんな内容の教材に興味を感じますか。(複数回答可)

	全体	1330	
1	初歩的な文法を理解し、文章が読めるようになる教材	451	33.9%
2	旅行などにも役に立つ日常会話が多い教材	427	32.1%
3	同年代の若い人々の日常生活が分かる教材	122	9.2%
4	専門分野に関連する教材	44	3.3%
5	詩や小説などの文学作品に触れられる教材	128	9.6%

6	フランス語圏の社会や文化が分かる教材	259	19.5%
7	自分のことを伝えるのに使える身近な表現中心の教材	187	14.1%
8	その他	24	1.8%

回答者は、他よりやや多い平均 2.1 項目を選択している。「初歩的な文法を理解し、文章が読めるようになる教材」は昔から変わらぬ要望で、回答の 33.9%を占めて第一位である。また、「旅行などにも役に立つ日常会話が多い教材」が 32.1%で第二位である。これも予想された要望である。「自分のことを伝えるのに使える身近な表現中心の教材」の 14.1%も勘案すると、受講生は早くフランス語で日常的な事柄を話したいことが分かる。しかし、実際の教材はどのようなのだろうか。「フランス語圏の社会や文化が分かる教材」が 19.5%で第三位である。外国語外国文化に対する興味が第一位ではないことは教材作りのコンセプトに対して大いに参考になろう。「自分のことを伝えるのに使える身近な表現中心の教材」が 14.1%で、「詩や小説などの文学作品に触れられる教材」の 9.6%より多い。今や、文学講読よりは日常的な自己表現のための教材が求められているのだろう。

17. あなたはフランス語を学習してどのような方面の能力を身につけたいと思っていますか。(複数回答可)

	全体	1330	
1	専門書や文学作品を読む基礎学力をつけたい	266	20.0%
2	新聞・雑誌や簡単な読み物が読めるようになりたい	415	31.2%
3	手紙や簡単な文章が書けるようになりたい	343	25.8%
4	簡単な日常会話が話せるようになりたい	770	57.9%
5	フランス語でコミュニケーションがとれるようになりたい	643	48.3%
6	フランス語の映画や音楽を楽しめるようになりたい	421	31.7%
7	教養としてフランス語の基本的な知識を持ちたい	353	26.5%
8	旅行の際に役立てたい	555	41.7%

9	フランス語圏で生活するのに困らないようにしたい	186	14.0%
10	その他	30	2.3%

回答者は、ほかよりも多い平均 3 項目選択している。フランス語学習の動機付けが多様であることを示している。「簡単な日常会話が話せるようになりたい」が 57.9%で、「フランス語でコミュニケーションがとれるようになりたい」の 48.3%、そして「旅行の際に役立てたい」の 41.7%、さらに、「手紙や簡単な文章が書けるようになりたい」の 25.8%の数字からは、日常的な自己表現のための教材が求められていることと身につけたい能力の中味は対応している。それでも、「新聞・雑誌や簡単な読み物が読めるようになりたい」の 31.2%、「専門書や文学作品を読む基礎学力をつけたい」の 20.0%、「教養としてフランス語の基本的な知識を持ちたい」の 26.5%の数字からは、昔ながらの教養養成の語学力も期待されている。はたして、両方の要望に応えられる授業が展開できるだろうか。(教員アンケートでは、「第二外国語としてのフランス語の教育目標」として、2 項目まで選択可で、「教養としてフランス語の基本的な知識を持つ」(71.1%)、「辞書を使って、新聞、雑誌や文献を読むための基礎的な能力」(47.1%)、「旅行に役立つ程度の能力」(38.0%)、「フランス語圏で基本的な生活ができる程度の能力」(11.8%)、「フランス語を使って私的な交流ができる程度の能力」(10.2%)、「フランス語圏の大学に留学ができる程度の能力」(3.7%)、「その他」(5.3%)である。受講生の要望とはほぼ逆転している)

18. 現在受けている授業を基礎にして、将来あなたが望む能力は得られると思いますか。

	全体	1330	
1	得られる	145	10.9%
2	いくらかは得られる	727	54.7%
3	あまり得られない	218	16.4%
4	得られない	117	8.8%
5	わからない	121	9.1%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「得られる」の 10.9%と「いくらかは得られる」の 54.7%を合わせると、65.6%になり、現状で多少なりとも学生の要望に答えられている。しかし、「あまり得られない」の 16.4%と「得られない」の 8.8%が合わせて、25.2%もある。むしろ早急な授業改善が求められている。

19. あなたが好ましいと思うのは、どんな授業形態でしょうか。(複数回答可)

	全体	1331	
1	文法・訳読中心の授業	542	40.7%
2	会話中心の授業	488	36.7%
3	ネイティブ・スピーカーによる授業	319	24.0%
4	読み書き話し聞く総合的な授業	675	50.7%
5	聞き取り重視の授業	100	7.5%
6	フランス語だけで進める授業	89	6.7%
7	CALL 教室で行う授業	20	1.5%
8	実物やなまの教材を使う授業	72	5.4%
9	ビデオ、CD、OHP などの機器を活用	173	13.0%
10	コンピュータを用いる授	25	1.9%
11	フランス語圏の文化や社会について考える授業	225	16.9%
12	その他	9	0.7%

回答者は、他よりもやや多い平均 2.1 項目選択している。「読み書き話し聞く総合的な授業」は 50.7%で、現行の多くの授業であり、受講生の要望にある程度は応えているだろう。「文法・訳読中心の授業」は 40.7%で、伝統的な授業だが、決して否定されてはいない。「会話中心の授業」は 36.7%で、フランス語による日常的自己表現法を早く獲得したいことの現れだろう。同じ傾向として「ネイティブ・スピーカーによる授業」の 24.0%と「フランス語だけで進める授業」の 6.7%の数字は無視できない。授業形態の改革の契機になりうる。「フランス語圏の文化や社会について考える授業」は 16.9%で、フランス語の授業が文化紹介や文化論の授業でもあってほしいという要望も少なくない。「ビデオ、CD、OHP などの機器を活用」の 13.0%は、ときどき利用してほしいという意思表示だろう。効果があるとされる「CALL 教室で行う授業」への評価が 1.5%とは、意外と少ない。未経験だからこの数字であると解釈できるが、多くの学生が対面授業を望んでいる。

20. フランス語を含めた外国語の授業の方法についてどんな要望がありますか。

(複数回答可)

	全体	1327	
1	もっと楽しい授業をしてほしい	436	32.9%

2	授業をもっとゆっくり進めてほしい	307	23.1%
3	授業内容をもっとやさしくしてほしい	265	20.0%
4	もっと厳しい指導をしてほしい	47	3.5%
5	要点を押さえた授業をしてほしい	344	25.9%
6	大きな声ではっきり話してほしい	64	4.8%
7	板書事項をノートに取る時間がほしい	100	7.5%
8	読みやすい字できちんと板書してほしい	137	10.3%
9	もっと授業数を増やしてほしい	167	12.6%
10	ネイティブの授業を増やしてほしい	239	18.0%
11	人生や生き方について話してほしい	107	8.1%
12	その他	92	6.9%

回答者は平均 1.7 項目選択している。「もっと楽しい授業をしてほしい」の 32.9%は、当然の要求だろう。ただ、何が楽しいのかは不明だ。「要点を押さえた授業をしてほしい」の 25.9%と「授業をもっとゆっくり進めてほしい」の 23.1%、さらにと「授業内容をもっとやさしくしてほしい」の 20.0%の数字は、現状の授業運営には満足していないことを示す。いずれも教えるべき内容の軽減や簡便化を要望している。「ネイティブの授業を増やしてほしい」の 16.7%は、数字的には少ないが、フランス語学習の動機付けになるのだから、当然の要求である。「人生や生き方について話してほしい」の 7.8%は、教員が信頼されている数字と見るべきか。「大きな声ではっきり話してほしい」の 5.4%、「板書事項をノートに取る時間がほしい」の 7.2%、「読みやすい字できちんと板書してほしい」9.4%は、改善できる数字である。「もっと授業数を増やしてほしい」の 11.5%は、うれしい要望だが、現状では実現しにくい要望だ。「もっと厳しい指導をしてほしい」の 3.4%は、動機付けができていて授業に意欲的に参加している数字であるが、少ない。

21. あなたはフランスやフランス語圏の文化に関心がありますか。

	全体	1329	
1	非常にある	350	26.3%
2	かなりある	383	28.8%
3	少しある	514	38.7%
4	ほとんどない	54	4.1%
5	全くない	28	2.1%

「非常にある」の 26.3%と「かなりある」の 28.8%を合わせると、55.1%になる。さらに「少しある」の 38.7%を加えると、93.8%になる。フランス語学習とフランスやフランス語圏の文化の学習と一体であるべきなのだろう。

22. (問 21 で 1 か 2 か 3 と答えた人に)次の中であなたが関心を持っている事柄はどのようなものですか。(複数回答可)

	全体	1253	
1	科学技術	39	3.1%
2	政治・経済	158	12.6%
3	歴史	369	29.4%
4	思想・哲学	231	18.4%
5	美術・音楽・映画・演劇	815	65.0%
6	言語	292	23.3%
7	文学	236	18.8%
8	風土・生活	530	42.3%
9	料理・ファッション・スポーツ・芸能	713	56.9%
10	フランス語圏の製品	134	10.7%
11	その他	13	1.0%
12	該当なし	0	0.0%

回答者はかなり多い平均 2.8 項目を選択している。「美術・音楽・映画・演劇」は 65.0%で、教材や授業運営の活性化のヒントになる。「料理・ファッション・スポーツ・芸能」は 56.9%で同様だろう。「風土・生活」は 42.3%で少なくない。他文化への実際的関心の深さが裏付けられる。「歴史」の 29.4%以外の「言語」の 23.3%、「文学」の 18.8%、「思想・哲学」の 18.4%は競い合うように、二割近い受講生の関心の対象になっている。「政治・経済」への関心が 12.6%という数字も無視できない。政治や経済を専門とする受講生を引き込む授業が期待されている。

23. あなたは必要単位を取った後もフランス語を学びたいですか

	全体	1330	
1	はい	795	59.8%
2	いいえ	535	40.2%

「はい」の 59.8% は多くない。約 4 割が継続したくないのだから。その理由は問 25 で判明するが、大いに検討すべき数字だろう。

24. (問 23 で 1 と答えた人に) その理由は何ですか。(複数回答可)

	全体	928	
1	フランス語が好きである	363	39.1%
2	フランス語圏に関心がある	427	46.0%
3	他の外国語学習にも役立つ	117	12.6%
4	英語以外の外国語を身につけたい	424	45.7%
5	フランス語の教師に感化された	58	6.3%
6	将来の仕事に役立てたい	172	18.5%
7	フランス語の資格を取りたい	173	18.6%
8	ヨーロッパの歴史・文学・芸術を知る上で不可欠	166	17.9%
9	教養を高め、人間的視野を広げる	192	20.7%
10	国際交流のための社会的要請に応える	113	12.2%
11	日本や日本人のあり方について考える視点を学ぶ	54	5.8%
12	言語一般に対するセンスを高める	100	10.8%
13	知的な訓練の手段として	16	1.7%
14	実践的な語学力をつける	49	5.3%
15	外国語学習を通して異文化を理解する能力を養成する	128	13.8%
16	その他	12	1.3%
17	該当無し	93	10.0%

回答者はかなり多い平均 2.9 項目を選択している。「フランス語圏に関心がある」が 46.0% で、「フランス語が好きである」の 39.1% よりやや多い。その両者を合わせた「外国語学習を通して異文化を理解する能力を養成する」が 13.8% で、外国

語学習と一般的な異文化理解を組み合わせた授業は難しいことを示す。言語そのものへの関心は、「英語以外の外国語を身につけたい」の 45.7%や「他の外国語学習にも役立つ」の 12.6%や「言語一般に対するセンスを高める」の 10.8%から窺い知れる。「教養を高め、人間的視野を広げる」は 20.7%、ヨーロッパの歴史・文学・芸術を知る上で不可欠」は 17.9%で、外国への関心の強さが衰えてはいないことを示す。「日本や日本人のあり方について考える視点を学ぶ」は 5.8%で、比較文化の授業は難しいことを示す。他方、「将来の仕事に役立てたい」の 18.5%、「国際交流のための社会的要請に応える」の 12.2%などの将来的な実践重視の数字や、「フランス語の資格を取りたい」の 18.6%、「実践的な語学力をつける」の 5.3%などの資格取得希望の数字も無視できない。

25. (問 23 で 1 と答えた人に) その理由は何ですか。(複数回答可)

	全体	508	
1	もともと外国語は苦手である	158	31.1%
2	フランス語やフランス語圏に興味を持ってない	33	6.5%
3	授業がつまらない	75	14.8%
4	学習の負担が重い	231	45.5%
5	自分の勉強ぶりではやっても見込みがない	126	24.8%
6	教師が気に食わない	21	4.1%
7	評価が厳しく単位が取りにくい	21	4.1%
8	外国語は英語だけで事足りる	52	10.2%
9	将来何の役に立つか分からない	68	13.4%
10	その他	26	5.1%
11	該当なし	5	1.0%

回答者は平均 1.6 項目を選択している。フランス語学習を継続したくない理由の第一位は、「学習の負担が重い」で 45.5%である。さらに「もともと外国語は苦手である」の 31.1%や、「自分の勉強ぶりではやっても見込みがない」の 24.8%は大きな数字である。「授業がつまらない」の 14.8%や「フランス語やフランス語圏に興味を持ってない」の 8.0%は授業運営次第で改善できるが、「外国語は英語だけで事足りる」の 10.2%さらには「将来何の役に立つか分からない」13.4%の受講生に対しては、なんらかの対策が必要だろう。さもないならば、第二外国語は希

望者のみに限定しようとする風潮が強化されるだろう。

26. フランス語の学習について、負担の度合いをどのように感じますか。

	全体	1330	
1	重い	190	14.3%
2	どちらかといえば重い	515	38.7%
3	どちらともいえない	463	34.8%
4	どちらかといえば軽い	132	9.9%
5	軽い	30	2.3%

「重い」の 14.3%と「どちらかといえば重い」の 38.7%を合わせると、53.0%になり、半数以上が負担を感じている。では、負担軽減といっそう有意義なフランス語学習とは両立できるだろうか。

27. ネイティブによる授業を受けていますか。

	全体	1330	
1	受けている	456	34.3%
2	受けていない	874	65.7%

「受けていない」は 65.7%で多い。ネイティブの授業はおおいに動機付けや学習の励みになるが、授業コマ数が不十分であるためネイティブの授業ができないのが現実だ。それでも、解決法はいくつかあるだろう。集中講義やインターネット授業等だ。

28-1. フランス語の検定試験を受験したことがありますか。(該当項目に○をつけてください)

	全体	1326	
1	5 級	141	10.6%
2	4 級	515	38.8%
3	3 級	51	3.8%
4	準 2 級	18	1.4%
5	2 級	13	1.0%
6	準 1 級	4	0.3%
7	1 級	2	0.2%
8	ない	648	48.9%

延べ数では 56.3%だが、個人レベルでは、「ない」の 48.9%から逆算して 51.1%が受験したことがある。検定試験というある程度客観的基準でフランス語の力を計りたいという判定要望の指針になるだろう。

28-2. DELF/DALF

	全体	851	
1	A1	2	0.2%
2	A2	3	0.4%
3	B1	4	0.5%
4	B2	3	0.4%
5	C1	1	0.1%
6	C2	1	0.1%
7	ない	750	88.1%

回答数が急減した。DELF/DALFの意味が分からないか、現状では受験しなくてよいという結果なのだろう。延べ人数で14名（1.7%）である。長期留学を前提にしていない現行のフランス語教育の実情の反映とみるべきだろうか。

28-3. TCF

	全体	765	
1	ある	23	3.0%
2	ない	735	96.1%

回答数はさらに減った。しかし、DELF/DALFの受験生数（14名）よりは、多い（23名）。

29-1. フランス語の検定試験をこの先受験するつもりはありますか。

	全体	1323	
1	5級	287	21.7%
2	4級	349	26.4%
3	3級	64	4.8%
4	準2級	36	2.7%
5	2級	29	2.2%
6	準1級	11	0.8%
7	1級	10	0.8%
8	ない	572	43.2%

延べ数で56.8%ほどだ。「ない」の43.2%から逆算して、56.8%の学生が仏検を視野に入れている。仏検対策等の補助授業も検討すべきなのだろう。

29-2. DELF/DALF

	全体	950	
1	A1	0	0.0%

2	A2	5	0.5%
3	B1	1	0.1%
4	B2	4	0.4%
5	C1	4	0.4%
6	C2	3	0.3%
7	ない	747	78.6%

回答数が急減した。延べ人数で 17 名（1.7%）である。この数は潜在的な留学希望者の数字だろうか。

29-3.TCF

	全体	771	
1	ある	2	0.3%
2	ない	756	98.1%

回答数が急減した。問 28 では 23 名いた。

30. フランス語以外の検定試験を受験したことがありますか。

	全体	1330	
1	ある	914	68.7%
2	ない	416	31.3%

「ある」は 68.7%なので、多くの受講生が検定試験をむしろ望んでいるというべきだろう。

31. 在学中にフランス語圏へ留学したいと思っていますか。

	全体	1329	
1	ぜひ留学したい	184	13.8%
2	機会があれば行ってみたい	730	54.9%
3	関心はない	415	31.2%

「ぜひ留学したい」の 13.8%と「機会があれば行ってみたい」の 54.9%とを合わせれば、68.7%になり、留学希望はあいかわらず低くない。しかし、「機会があれば行ってみたい」の希望の程度が不明だ。留学は外国語学習の継続の重要な動機付けになるので、授業の延長として支援するシステム作りも重要な検討課題だろう。

32. 将来フランス語圏への留学を希望しますか。

	全体	1329	
1	ぜひ留学したい	188	14.1%
2	機会があれば行ってみたい	753	56.7%

3	関心はない	388	29.2%
---	-------	-----	-------

「ぜひ留学したい」の14.1%と「機会があれば行ってみたい」の56.7%とを合わせれば、70.8%と、将来の留学希望は相変わらず低くない。しかし、「機会があれば行ってみたい」の希望の程度が不明だ。将来の留学といえども、外国語学習の重要な動機付けになるので、授業の延長として支援するシステム作りも重要な検討課題だろう。「関心はない」の29.2%は、フランス語圏への留学に関心がないのか、最近の傾向と言われるようにそもそも留学に関心がないのか。

4. 高校機関向けアンケートの結果

フランス語授業の実施高校の機関宛 241 箇所アンケートを送付し、94 件を回収した。そのうち有効回答票は 89 件、有効回収率は 36.9%である。

1. 設立形態を以下の区分から選んでください。

	全体	89	
1	国立	0	0.0%
2	都道府県立	61	68.5%
3	私立	28	31.5%

私立校の倍の数の公立校でフランス語が教えられている。高等学校におけるフランス語教育は以前は私立校が中心であったが、公立校が担う役割が大きくなってきている。

2-1. 高等学校分類を以下の区分から選んでください

	全体	89	
1	普通科高校	50	56.2%
2	単位制普通科高校	6	6.7%
3	総合高校	18	20.2%
4	単位制総合高校	6	6.7%
5	その他	16	18.0%

選択科目の幅の広い総合高校が占める割合が回答全体の 3 割近い。

3-1. 学内すべての生徒がフランス語を学べますか、あるいは特別なコース等の生徒だけですか

	全体	89	
1	学内すべての生徒	32	36.0%
2	特別なコースの生徒のみ	29	32.6%
3	その他	28	31.5%

特別なコースの生徒のみがフランス語を学ぶ割合が 32%あり、選択肢としての可能性は開かれつつあるものの、フランス語を学ぶためには、まだ環境に制限があるようである。

4. フランス語教育のあり方を以下の区分から選んでください

	全体	88	
1	第1外国語として	3	3.4%
2	英語との並列・複言語教育	10	11.4%
3	第2外国語として	79	89.8%

5-1-1. 問4でa(第1外国語として)と答えた貴校にお聞きします。2010年度の各学年の履修単位数と履修生徒数をご回答ください。

1年単位

	全体	93	
1	1単位	0	0.0%
2	2単位	0	0.0%
3	3単位	2	2.2%
4	4単位	0	0.0%
5	5単位	0	0.0%
6	6単位	1	1.1%
7	7単位	0	0.0%
8	8単位	0	0.0%
9	9単位	0	0.0%
10	10単位	0	0.0%
11	11単位	0	0.0%
12	12単位	0	0.0%
13	13単位	0	0.0%
14	14単位	0	0.0%
15	15単位以上	0	0.0%
16	未記入	90	96.8%

5-2-1. 2年単位

	全体	93	
1	1単位	0	0.0%
2	2単位	0	0.0%
3	3単位	0	0.0%
4	4単位	0	0.0%
5	5単位	0	0.0%

6	6 単位	2	2.2%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	1	1.1%
9	9 単位	0	0.0%
10	10 単位	0	0.0%
11	11 単位	0	0.0%
12	12 単位	0	0.0%
13	13 単位	0	0.0%
14	14 単位	0	0.0%
15	15 単位以上	0	0.0%
16	未記入	90	96.8%

5-3-1. 3 年単位

	全体	93	
1	1 単位	0	0.0%
2	2 単位	0	0.0%
3	3 単位	0	0.0%
4	4 単位	1	1.1%
5	5 単位	0	0.0%
6	6 単位	1	1.1%
7	7 単位	1	1.1%
8	8 単位	2	2.2%
9	9 単位	0	0.0%
10	10 単位	0	0.0%
11	11 単位	0	0.0%
12	12 単位	1	1.1%
13	13 単位	0	0.0%
14	14 単位	0	0.0%
15	15 単位以上	0	0.0%
16	未記入	89	95.7%

5-1-2. 1 年人数

	全体	93	
--	----	----	--

1	0-5 人	0	0.0%
2	6 人-10 人	1	1.1%
3	11 人-15 人	1	1.1%
4	16-20 人	0	0.0%
5	21-25 人	1	1.1%
6	26-30 人	0	0.0%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	0	0.0%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	0	0.0%
12	未記入	90	96.8%

5-2-2. 2 年人数

	全体	93	
1	0-5 人	0	0.0%
2	6 人-10 人	2	2.2%
3	11 人-15 人	0	0.0%
4	16-20 人	0	0.0%
5	21-25 人	0	0.0%
6	26-30 人	1	1.1%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	0	0.0%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	0	0.0%
12	未記入	90	96.8%

5-3-2. 3 年人数

	全体	93	
1	0-5 人	0	0.0%
2	6 人-10 人	2	2.2%
3	11 人-15 人	0	0.0%

4	16-20 人	1	1.1%
5	21-25 人	1	1.1%
6	26-30 人	0	0.0%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	0	0.0%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	0	0.0%
12	未記入	89	95.7%

6-1-1. 問4でb(英語との並列・複言語教育として)と答えた貴校にお聞きします。2010年度の各学年のフランス語の履修単位数と履修生徒数をご回答ください。

1年単位

	全体	93	
1	1 単位	1	1.1%
2	2 単位	1	1.1%
3	3 単位	0	0.0%
4	4 単位	1	1.1%
5	5 単位	0	0.0%
6	6 単位	0	0.0%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	0	0.0%
9	9 単位	0	0.0%
10	10 単位	0	0.0%
11	11 単位	0	0.0%
12	12 単位	0	0.0%
13	13 単位	0	0.0%
14	14 単位	0	0.0%
15	15 単位以上	0	0.0%
16	未記入	90	96.8%

6-2-1. 2年単位

	全体	93	
1	1 単位	1	1.1%
2	2 単位	4	4.3%
3	3 単位	0	0.0%
4	4 単位	1	1.1%
5	5 単位	0	0.0%
6	6 単位	0	0.0%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	0	0.0%
9	9 単位	0	0.0%
10	10 単位	0	0.0%
11	11 単位	0	0.0%
12	12 単位	0	0.0%
13	13 単位	0	0.0%
14	14 単位	0	0.0%
15	15 単位以上	0	0.0%
16	未記入	87	93.5%

6-3-1. 3 年単位

	全体	93	
1	1 単位	1	1.1%
2	2 単位	5	5.4%
3	3 単位	0	0.0%
4	4 単位	0	0.0%
5	5 単位	0	0.0%
6	6 単位	0	0.0%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	1	1.1%
9	9 単位	0	0.0%
10	10 単位	0	0.0%
11	11 単位	0	0.0%
12	12 単位	0	0.0%
13	13 単位	0	0.0%

14	14 単位	0	0.0%
15	15 単位以上	0	0.0%
16	未記入	86	92.5%

6-1-2. 1 年人数

	全体	93	
1	0-5 人	1	1.1%
2	6 人-10 人	0	0.0%
3	11 人-15 人	0	0.0%
4	16-20 人	0	0.0%
5	21-25 人	1	1.1%
6	26-30 人	0	0.0%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	0	0.0%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	1	1.1%
12	未記入	90	96.8%

6-2-2. 2 年人数

	全体	93	
1	0-5 人	2	2.2%
2	6 人-10 人	1	1.1%
3	11 人-15 人	2	2.2%
4	16-20 人	1	1.1%
5	21-25 人	0	0.0%
6	26-30 人	0	0.0%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	0	0.0%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	1	1.1%
12	未記入	86	92.5%

6-3-2. 3 年人数

	全体	93	
1	0-5 人	3	3.2%
2	6 人-10 人	0	0.0%
3	11 人-15 人	0	0.0%
4	16-20 人	3	3.2%
5	21-25 人	1	1.1%
6	26-30 人	0	0.0%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	0	0.0%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	0	0.0%
12	未記入	86	92.5%

7-1. 問4でb(第2外国語として)と答えた貴校にお聞きします。必修、必修選択等の区別を以下の区分から選んでください

	全体	79	
1	必修科目	4	5.1%
2	必修選択科目	30	38.0%
3	自由選択科目	54	68.4%

全体の70%近くは自由選択であるが、必修であるところも5%ある。

7-2) 第2外国語としてフランス語を教える場合の他の選択科目

英語以外の外国語としては、中国語、ドイツ語、ハンガール、スペイン語の順で件数が多く、少数だがポルトガル語、ロシア語、アラビア語もあった。外国語以外では音楽、美術、書道、体育、情報があり、数学、生物、化学、政経、古典、日本史、など受験科目の補習と思われるものと並んで選択されている場合もあった。その他の科目としては工芸、食物、世界の文学、郷土文学、ソルフェージュ、ビジュアルデザイン、電子機械製図、テキスタイルデザイン、会計実務、体育理論、情報理論、ドローイング、生活デザイン、生涯教育、簿記、演奏法、陶芸、パソコンなど。

外国語の選択肢として英語が含まれている場合もあるが、それは増加単位として英会話や受験講座の英語が入っているものと思われる。他言語の種類を見ると、実用性の見地から必要と考えられているものが多い。今では外国語は以前のような特殊な位置にあるものではなく、他教科の多くの科目とともに教養科目のひとつとして扱われることが多いことも、上記の多岐にわたる科目名からわかる。

7-3-1-1. 2010 年度の各学年の履修単位数と履修生徒数

1 年

	全体	89	
1	1 単位	2	2.2%
2	2 単位	11	12.4%
3	3 単位	1	1.1%
4	4 単位	1	1.1%
5	5 単位	0	0.0%
6	6 単位	0	0.0%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	0	0.0%
9	未記入	74	83.1%

7-3-1-2. 2 年単位

	全体	89	
1	1 単位	1	1.1%
2	2 単位	57	64.0%
3	3 単位	2	2.2%
4	4 単位	3	3.4%
5	5 単位	1	1.1%
6	6 単位	1	1.1%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	0	0.0%
9	未記入	26	29.2%

7-3-1-3. 3 年単位

	全体	89	
1	1 単位	1	1.1%
2	2 単位	50	56.2%
3	3 単位	3	3.4%
4	4 単位	7	7.9%
5	5 単位	0	0.0%
6	6 単位	1	1.1%
7	7 単位	0	0.0%
8	8 単位	0	0.0%
9	未記入	29	32.6%

第2外国語としても2単位が最も多い。50分授業が週1回で通年というものである。

7-3-2-1. 1年人数

	全体	89	
1	0-5 人	6	6.7%
2	6 人-10 人	4	4.5%
3	11 人-15 人	1	1.1%
4	16-20 人	1	1.1%
5	21-25 人	1	1.1%
6	26-30 人	1	1.1%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	1	1.1%
9	41-45 人	0	0.0%
10	46 人-50 人	0	0.0%
11	50 人以上	5	5.6%
12	未記入	69	77.5%

7-3-2-2. 2年人数

	全体	89	
1	0-5 人	9	10.1%
2	6 人-10 人	12	13.5%
3	11 人-15 人	23	25.8%

4	16-20 人	5	5.6%
5	21-25 人	5	5.6%
6	26-30 人	3	3.4%
7	31-35 人	1	1.1%
8	36-40 人	1	1.1%
9	41-45 人	1	1.1%
10	46 人-50 人	1	1.1%
11	50 人以上	4	4.5%
12	未記入	24	27.0%

7-3-2-3. 3 年人数

	全体	89	
1	0-5 人	21	23.6%
2	6 人-10 人	11	12.4%
3	11 人-15 人	10	11.2%
4	16-20 人	5	5.6%
5	21-25 人	6	6.7%
6	26-30 人	3	3.4%
7	31-35 人	0	0.0%
8	36-40 人	2	2.2%
9	41-45 人	1	1.1%
10	46 人-50 人	1	1.1%
11	50 人以上	2	2.2%
12	未記入	27	30.3%

回答数が1年20例、2年65例、3年62例。やはり2, 3年次にフランス語を扱う高校が多い。履修人数も10名前後が最も多いが、30名以上、50名以上というところもあり、人数はフランス語に対する関心の深さも関係していると考えられる。

7-4. 貴校のフランス語の教育目的とはどのようなものですか（2つまで○をつけてください）

	全体	82	
1	フランス語の基本的な知識を持つこと	50	61.0%

2	英語以外の言語を学ぶこと	45	54.9%
3	英語圏以外の文化に触れること	52	63.4%
4	大学進学時に評価されること	6	7.3%

複数回答が可能であるため82の対象に対して153の回答があり、外国語教育と異文化理解を2つの柱としていることがわかる。また、大学進学時の評価を期待するものが6例あり、第2外国語であっても高大連携の可能性を検討する必要があるだろう。

7-5-1. 貴校のフランス語教育の到達目標はどのようなものですか（2つまで○をつけてください）

	全体	82	
1	仏検準1級程度	0	0.0%
2	仏検2級程度	4	4.9%
3	仏検3級程度	7	8.5%
4	仏検4級程度	14	17.1%
5	仏検5級程度	27	32.9%
6	フランス語の基本的な仕組みについての知識を獲得すること	55	67.1%
7	旅行に役立つ程度の能力	16	19.5%
8	私的な交流ができる程度能力	14	17.1%
9	辞書を使って新聞・雑誌を読む程度の基礎的な能	5	6.1%
10	フランス語圏の高校・大学に留学できる程度の能力	1	1.2%

限られた時間の中で、能力習得に向けて目標を掲げ努力されているのがわかる。仏検3級以上はフランス語を第1外国語とする学習者が多いかと思われる。第2外国語学習の年間の学習事項から考えれば仏検5級程度はわかりやすい目標であろう。また旅行や交流といった目的からコミュニケーション能力の養成を重視する傾向もうかがわれる。

8-1. フランス語の検定試験の受験を勧めていますか

	全体	85	
1	仏検	52	61.2%
2	DELF	9	10.6%
3	TCF	0	0.0%
4	いない	32	37.6%

文法項目の理解から見ても仏検は少ない時間数のなかで設定しやすい目標であろう。DEL F を目指すには学習時間が少ないかもしれない。

検定試験を勧める理由としては、学習の励みになる、レベルの把握によい、目標設定、資格取得、大学入試・推薦で評価される、普段の授業内容を補う実用的知識の涵養、などの他に、単位認定として、文法の理解度を深める、英検に慣れているため親しみやすい、基礎固めといった理由があった。どれだけの力がついたかを見極める判断基準として検定試験が利用されている事が多いようだ。実際に受験させるかどうかは別としても、目指すべきものを明示する例となっている。大学入試・推薦で評価されるという回答例は設問7-4と同様、高大連携の枠組みの中で、今後積極的に考えてゆくべきものであるかもしれない。

一方検定試験を勧めない理由としては、現在の授業時間では検定レベルに到達しない、

検定を受けることを目的としている授業内容ではない、仏検の試験内容に疑問を感じる、

級を取る強い動機が生徒にない、検定制度の理解が十分でない、本人の意思に任せている、生徒の負担に配慮する、需要がない、受験という枠組みでは英語と変わりなくなる、一般教養としてフランス語を身につけてもらえばよいから、受験科目ではないため、等があった。フランス語学習をどのように考えるかによって、検定試験の扱い方も変わる。初めに検定ありきではなく、結果として検定という判断基準もあるということであろう。

9-1. 高校生対象のフランス語コンクールへ生徒を参加させたことはありますか。

	全体	88	
1	ある	27	30.7%
2	ない	61	69.3%

1の参加コンクールの名称と件数

- ①西日本フランス語コンクール：7件
- ②スケッチ暗唱大会：5件
- ③高校生フランス語コンクール：2件
- ③高校生フランス語ビデオ・コンクール：2件
- ③高校生フランス語単語コンクール：2件

コンクール参加が全体の3分の1に達しているのは注目に値する。これは非常

勤にもかかわらず学外活動を指導しているとしての多くの教員の努力の現れであろう。また検定試験同様、外国語教育の中での位置づけの差によるものでもあろう。

10-1. フランス語で大学入学試験を受験する生徒

	全体	87	
1	いる	7	8.0%
2	いない	80	92.0%

1の全履修生に対する割合

- ① 0-10%：4件
- ② 20-30%：2件
- ③ 80-100%：2件（ただし、①との重複回答が1件）

11. 高校入学前にフランス語を学んだ経験のある生徒の、全履修生に対する割合をご回答ください。

a. いる ～5% 9件、～10% 2件、～40% 1件、100% 2件

b. いない 66件

未回答・空欄 9件

私立中高一貫校の場合、中学からフランス語を始めるところもあり、100%の2例はその場合だろう。それ以外にもフランス語既習者があるが、フランス語圏からの帰国子女、あるいは独習者など、いくつかの理由が推測される。

12-1. 学内にフランス語圏交換留学制度・研修旅行などの制度はありますか

	全体	87	
1	ある	23	26.4%
2	ない	64	73.6%

25%以上の高校でフランス語圏の学校と交流がある。

12-2. ある場合

	全体	23	
1	Colibri	12	52.2%
2	学校独自	0	0.0%
3	その他	15	65.2%

高校が独自に交流を行うのは難しく、またフランス語圏の学校との交流を通じ

たフランス語教育の発展を考えても、コリブリの果たす役割は大きい。

13. 貴校のフランス語教育で使用されている教科書を列挙し、またそれらの教科書についてご意見をお願いいたします。

複数の使用回答があった教科書のみタイトルと件数を挙げると、パスカル・オ・ジャポン(11)、発見フランス語教室(8)、Spirale(7)、サリュ(6)、ピエールとユゴー(4)、

アミカルマン・ビス(4)、Mon premier voyage en France(4)、シェルブールの雨傘(4)

C'est à toi(3)、彼女は食いしん坊 I(3)、オ・パ・キャマラッド(3)、フランス語 21(2)、アメリーとケンゾーI(2)、フランス語でサバイバル(2)、カフェ・フランセ(2)、F comme français(2)、メビウス(2)。

評価する意見としては、平易でわかりやすい、高校生向きで使いやすい、実際の、コンパクトにまとめている、語彙が絞られていて初級者によい、カラーで見やすい、コンクールがあるのでモチベーションが上げられる、価格が安い、仏検対策に適している、DVD付でフランスの情報豊富、versionが充実している、かなのふり方に工夫が見られる、といったものがある。

また問題点を指摘する意見としては、教科書が平易になっているので適切な文法教材を見つけるのに苦労する、文法事項が本文会話文に反映されていない、文法説明がもう少し欲しい、文法とコミュニケーションの両方を教えるのが難しい、内容・映像が古い、フランス文化の記述がさらに充実するとよい、フランス人には使いやすいが日本人には使いにくい、DVDは楽しいが教科書としては使いにくい、紙面に余裕が欲しい、一課の学習内容が多すぎる、表現が硬く、文法に偏りがち、コミュニケーションな activité が少ない、巻末に簡単な辞書が欲しい、市販の教科書に適切なものがない、平易すぎるか難しすぎるかどちらか、高校生向けの基本的テキストがない、などがあった。

短時間でできるだけ効果が上げられるもの、また文法だけを教えるのではなくコミュニケーションを重視してフランス語でやりとりができるようにする事を目指すもの、そういった趣旨の日本で作られた文法読本総合教材が主として用いられている。しかし、高校生向きに作られた教科書が少ないのも現状である。また、どのような視点から扱うか、教員の要望が厳しくなっているのもわかる。

14-1-1. フランス語教育に従事する教員 専任教員

日本人

	全体	89	
1	1人	18	20.2%
2	2人	3	3.4%
3	3人	3	3.4%
4	4人	0	0.0%
5	5人	0	0.0%
6	5人以上	0	0.0%
7	未記入	65	73.0%

複数の専任日本人教員を抱える機関はわずか6%しかない。また、専任教員のいない機関が70%を占めている。

14-1-2. 専任外国人

	全体	89	
1	1人	1	1.1%
2	2人	0	0.0%
3	3人	0	0.0%
4	4人	0	0.0%
5	5人	0	0.0%
6	5人以上	0	0.0%
7	未記入	88	98.9%

専任の外国人教員は89の回答例のうち、わずか1例しかない。

14-1-3. 非常勤日本人

	全体	89	
1	1人	60	67.4%
2	2人	2	2.2%
3	3人	0	0.0%
4	4人	2	2.2%
5	5人	0	0.0%
6	未記入	25	28.1%

これらからフランス語教育のほとんどが非常勤教員によって支えられていることがわかるが、それも67%は1名のみである。ここでは全ての判断が1名

に任されていることになり、負担も大きいであろう。

14-1-4. 非常勤外国人

	全体	89	
1	1人	18	20.2%
2	2人	1	1.1%
3	3人	0	0.0%
4	4人	0	0.0%
5	5人	0	0.0%
6	未記入	70	78.7%

外国人教員は20%強の高校で教えている。外国人教員を採用するかしらないかは、外国語教育に対する各機関の考え方とも関係するであろう。また、今回の調査方法では、フランス語を教える教員が外国人のみという事例がどれくらいあるかはわからない。

14-1-5. ALT

	全体	89	
1	1人	14	15.7%
2	2人	0	0.0%
3	3人	0	0.0%
4	4人	0	0.0%
5	5人	0	0.0%
6	未記入	75	84.3%

14-1-6. 国籍

	全体	30	
1	フランス	27	90.0%
2	カナダ	1	3.3%
3	ニューカレドニア	0	0.0%
4	その他	2	6.7%

ほとんどがフランス本国のネイティブである。

14-2-1-1. 日本人専任・常勤・非常勤教員 フランス語免許の有無

	全体	78	
1	ある	56	71.8%
2	ない	21	26.9%

14. 1-a-2 他教科免許状

英語 11 件、ドイツ語 1 件、国語 1 件、地理・公民 1 件、商業 1 件

14-2-1-2. 学会加入

	全体	71	
1	仏文学会	3	4.2%
2	仏語教育学会	16	22.5%
3	ない	46	64.8%

14-2-1-3. 人数

	全体	26	
1	1 人	25	96.2%
2	2 人	0	0.0%
3	3 人	1	3.8%
4	4 人	0	0.0%
5	5 人	0	0.0%
6	5 人以上	0	0.0%
7	未記入	0	0.0%

学会加入は両学会あわせても 3 割にも満たない。中等教育におけるフランス語の発展を目指して、会員獲得を増やそうとするのであれば、両学会はより魅力ある企画を打ち出す必要があるだろう。

14-4. 教授法に関する研修会（スタージュ）への参加経験のある教員はいますか。

	全体	72	
1	いる	38	52.8%
2	いない	34	47.2%

1-d-1 教授法に関する研修会

国内スタージュ	10 件
フランススタージュ	9 件
ケベックスタージュ	8 件
Journée pédagogique de Dokkyo	8 件
Rencontre pédagogique du Kansai	8 件
Péka	2 件
公的機関が主催する研修会	1 件
他言語の研修会	1 件

スタージュや研修会への参加が5割を越えていることは、フランス語をどのように教えるかという教授法に関する関心の高まりを表している。

15. 貴校のフランス語教育で困難と感じられていることをご回答ください（複数回答可）

	全体	86	
1	履修単位数が少ない	27	31.4%
2	履修を高1から開始できない	24	27.9%
3	常勤教員がない	16	18.6%
4	大学受験外国語として選択できる大学が少ない	10	11.6%
5	教科書・問題集の高校生向きのものがない	25	29.1%
6	受験教科ではないという差別がある	16	18.6%
7	教育到達目標のコンセンサスがない	14	16.3%
8	生徒が外国に興味を失っている	15	17.4%
9	大学側から複言語学習が受験時に評価されない	11	12.8%
10	その他	20	23.3%

複数回答ではあるが、どの選択肢も2桁の割合を示しており、いずれも現在の高校教員にとっての問題点であることがわかる。特に単位数と履修年次は制度上の問題であり、改善が難しい問題ではあるが、実現できれば、それによって履修者が大きく増える可能性がある。高校生向き教材の開発も教員から要望の多いものであるが、発行部数との兼ね合いでなかなか実現が難しい問題である。そのほか、受験科目でないこと、常勤教員がないことはフランス語の科目としての存在理由を弱めている。確かな教育目標を設定して、生徒の関心を引きつけなければならないが、それを非常勤教員が行わねばならないという厳しい現状がかいま見える。

16. 今回の調査について、また現在の高校におけるフランス語教育についてお考えのことがあれば、自由にお書きください。

フランス語授業の縮小傾向を懸念するもの：

- ・ 英語偏重
- ・ 中国語との競合
- ・ フランス／フランス語の魅力が低下している
- ・ 履修者数の減少

(特に中等教育での) 第2外国語の意義として

- ・ 英語学習へのフィードバック効果もある
- ・ 大学で始めるより年齢的に学習効果が期待できる
- ・ 英語だけにかたよらないグローバルな視点の獲得
- ・ 語学に留まらぬより広い選択科目の中でフランス語(文化)のアピールする必要性

教育体制・教育環境に関するもの：

- ・ A L T / 教材費が過少(減少)、自己負担が多い
- ・ 教員の待遇の問題
- ・ 中等教育では実質的に非常勤が担っている
- ・ 他言語に比べ1クラスの生徒数が多すぎる
- ・ 高校生以下にも教えられる人材が少ない
- ・ 授業方針は非常勤に一任
- ・ 授業時間が少なすぎる
- ・ 短い時間の中で効果のあがる指導法が必要
- ・ 教材が少ない
- ・ 教授法の研修の場が少ない
- ・ 学外でフランス語活用の場が少ない。

状況の改善を求める切実な声からは、フランス語学習の意義は明確であるのに、それが正しく理解されず、限られた教育環境の中で、英語偏重の波と、他の外国語との競合にさらされている厳しい現実と、それに立ち向かう努力の様がよくわかる。フランス語教育の環境を改善し履修者を増やすには、教員間、高大間のより広範囲で豊富な情報交換の場が求められており、今回の結果を踏まえて、両学会は高校教員をさらに支援してゆく必要があるだろう。

5. 高校生向けアンケートの結果

フランス語授業の実施高校の機関宛の 241 個所の 25% に相当する 60 機関を選び出し、高校機関を通じてフランス語担当教員に高校生向けの質問票（約 30 部、コピーによる複数クラス調査も可とした）の配布と回収を依頼した。

送付数 60 件

回収数 24 件；回収率 40.0%

（また、一機関 1 クラスあるいは 1 コース等の回答とは限らず質問票をコピーして他のクラスや他のコース等実施した高校もあり（4 校）、一機関複数クラスやコース等も含む調査となった（総数 93 件）。今回は、それらも含めたデータ処理になった。その結果、有効回答票は 831 件となった）

有効回答票 831 件

・ 高校生のアンケート結果とコメント

1. あなたが在籍する学校は、次のうちどれですか。

	全体	831	
1	国立	7	0.8%
2	都道府県立	423	50.9%
3	私立	401	48.3%

フランス語の授業を実施している都道府県立（市立町立等含む）が 50.9% で、私立は 48.3% である。都道府県立（市立町立等含む）と私立が同程度である。

2. あなたの性別は、次のどちらですか。

	全体	831	
1	男	270	32.5%
2	女	561	67.5%

女子が 67.5% である。しかし、男子が 32.5% いる。大学での女子と男子の比率が 63 対 37 なので、高校では女子がやや多い。

3-1. あなたはどのような形でフランス語を学んでいますか。

	全体	829	
1	第 1 外国語として	29	3.5%
2	第 2 外国語として	740	89.3%
3	英語・フランス語をとりまぜて	41	4.9%
4	その他	19	2.3%

「第 2 外国語として」の 89.3%は圧倒的な数字である。「第 1 外国語として」の 3.5%や「英語・フランス語をとりまぜて」の 4.9%は、合わせれば 8.4%なので無視できる数字ではないが、高校では主としてフランス語が「第 2 外国語として」学習されている。

4. あなたの所属学年は。

	全体	831	
1	高 1	101	12.2%
2	高 2	389	46.8%
3	高 3	341	41.0%

「高 1」は 12.2%、「高 2」は 46.8%、「高 3」は 41.0%である。「高 1」から「高 2」になるときに、学習者が急激に増えている。科目構成や科目配当学年の差のためだろうか。「高 2」から「高 3」になるときに、やや数字が減っている。大学受験準備のために学習者が減ったものと思われる。

5-1. フランス語の学習はどのようにして、決めましたか。

	全体	830	
1	必修科目だった	76	9.2%
2	選択科目の中から自分で選択した	691	83.3%
3	先生・先輩・家族などから勧められた	23	2.8%
4	友達と相談して決めた	21	2.5%
5	その他	19	2.3%

「選択科目の中から自分で選択した」の 83.3%と「友達と相談して決めた」の 2.5%を合わせると、85.8%で、学習希望者は友人に相談したとしても、みずからフランス語選択を決めている。「必修科目だった」の 9.2%は、問 3 の「第 1 外国語として」が 3.5%なので、5.7%の高校生がフランス語を選択（？）必修「第 2 外国語として」学習していることが想定される。複言語学習のモデルになりうる。

6-1. フランス語を選択した理由を聞かせてください。(3つまで選択可)

	全体	826	
1	必修科目だから	73	8.8%
2	授業が面白そうだから	304	36.8%
3	フランス語が好きだから	133	16.1%
4	フランスに行ってみたい	447	54.1%
5	フランス語圏の文化・習慣について	304	36.8%

	て知りたい		
6	親・兄弟が勉強している・していた	42	5.1%
7	大学進学や自分の将来に役に立つかもしれないから	273	33.1%
8	時間割、他の選択科目との関係から	62	7.5%
9	その他	72	8.7%

複数回答可で、回答者は平均 2.1 項目を選んでいる。「フランスに行ってみよう」は 54.1%で、フランス語選択の動機の第一位である。「授業が面白そうだから」は 36.8%で、重要な数字だ。授業活性化の成果である。「フランス語圏の文化・習慣について知りたい」も 36.8%で、フランス語選択の当然な動機である。「大学進学や自分の将来に役に立つかもしれないから」は 33.1%で、かなり高い数字だ。大学人は肝に銘じるべきだろう。「フランス語が好きだから」の 16.1%も無視できない。フランス語学習の根幹をなすからだ。「必修科目だから」の 8.8%は、必修科目としてのフランス語選択が 1 割程度あることを示す。「時間割、他の選択科目との関係から」の 7.5%も、多くの選択可能性から選んでフランス語授業に参加しているとは言えるだろう。

7-1. あなたは過去にフランス語を勉強したことがありますか。

	全体	828	
1	ある	83	10.0%
2	ない	745	90.0%

「ある」は 9.2%で、何かしらフランス語に触れていれば、約一割の高校生が再度フランス語学習に挑戦することを示す。それゆえ、フランス語に触れる機会が増えれば、この数字も増えることになる。

7-2. どこで。

	全体	83	
1	小学校の授業で	31	37.3%
2	中学校の授業で	45	54.2%
3	ラジオ・テレビ	11	13.3%
4	4 会話教室などで	13	15.7%

過去にフランス語を勉強したことがあると答えた高校生のうち、「小学校の授業で」は 37.3%が、「中学校の授業で」は 54.2%がそうである。その差 16.9%は、小学校から始めてやめていなければ、中学校からフランス語学習を始めた数字で

ある。「ラジオ・テレビ」の 13.3%と「会話教室などで」の 15.7%の合計 29.0%は、学校以外でもフランス語に関心を持ったのである。今後、ラジオ・テレビや会話教室などとのネットワーク作りや情報交換などを行えば、いっそう効果的な授業運営ができるだろう。

8. あなたがフランス語の学習で望んでいることはなんですか。(3つまで選択可)

	全体	823	
1	フランス語を話せるようになりたい	615	74.7%
2	フランス語を読んだり書いたりできるようになりたい	375	45.6%
3	フランス語の文法を知りたい	45	5.5%
4	フランス語圏の文化・習慣について知りたい	236	28.7%
5	フランス語を通して、幅広い教養を身につけたい	156	19.0%
6	フランス語を話す人々との交流をしたい	262	31.8%
7	検定試験を受験したい	40	4.9%
8	進学や就職のために役立つ学習がしたい	105	12.8%

複数回答可で、回答者は平均 2.2 項目を選んでいる。「フランス語を話せるようになりたい」の 74.7%、「フランス語を話す人々との交流をしたい」の 31.8%、「フランス語を読んだり書いたりできるようになりたい」の 45.6%の数字は、それぞれ体験志向、自己表現志向が強いことの現れである。「フランス語圏の文化・習慣について知りたい」の 28.7%は、6-1 の設問、フランス語の選択理由「フランス語圏の文化・習慣について知りたい」の 36.8%より 8.1%減っている。体験学習、自己表現学習へとシフトしたからだろうか。「フランス語の文法を知りたい」は 5.5%で、それほど高くない。それに対して大学生ではフランス語そのものへの関心（「音の響きや言葉のリズム」41.1%や「文の構造」17.6%）が比較的高い。高校生では文法の学習より自己表現への欲求が強いと言える。「フランス語を通して、幅広い教養を身につけたい」は 19.0%で、大学生の「教養を高め、人間的視野を広げる」が 20.7%なので、教養を高めたいという志向はおおむね同程度である。高校生には、言語教育が教養教育であることが多少なりとも理解されている。「検定試験を受験したい」は 4.9%で、大学生の「フランス語の資格を取りたい」が

18.6%であるので、やはり資格よりは実践志向が確認できる。「進学や就職のために役立つ学習がしたい」は 12.8%であり、大学生では「将来の仕事に役立てたい」が 18.5%、「国際交流のための社会的要請に応える」が 12.2%なので、将来を見据えてフランス語学習をしているものが 高校でも 1 割強はいる。

9. フランス語の授業は楽しいですか。

	全体	826	
1	楽しい	352	42.6%
2	どちらかと言えば楽しい	328	39.7%
3	あまり楽しくない	98	11.9%
4	楽しくない	48	5.8%

「楽しい」の 42.6%と「どちらかと言えば楽しい」の 39.7%を合わせると、82.3%になり、満足感が高い。もちろん、「あまり楽しくない」の 11.9%と「楽しくない」の 5.8%を合わせた 17.7% は大きな数字だ。看過できないだろう。その原因を突き止めなければ、授業崩壊の遠因になるだろう。

10-2. あなたのフランス語の授業は週に何時間ありますか？

データ化不能。(コースによって基準が違うため、分類できないが、高校機関への調査では、2 単位が多いので、週 2 時間と見なせるだろう)。

それは以下のどれにあたりますか

	全体	788	
1	多い	65	8.2%
2	適当である	547	69.4%
3	少ない	176	22.3%

「適当である」の 69.4%は、7 割の高校生が現行の時間数に満足している。しかし、「少ない」の 22.3%は、現行の時間数では授業の中味が消化されていないことを示している。「多い」の 8.2%は、なぜ多いのか原因を突き止めるべきだろう。

11. 次年度あるいは高校卒業後もフランス語を学習したいですか。

	全体	830	
1	はい	445	53.6%
2	いいえ	126	15.2%
3	わからない	258	31.1%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の 53.6%は意外に少ない。設問 9 の「楽しい」の 42.6%と「どちらかと言えば楽しい」の 39.7%を合わせると、82.3%であったのに、フランス語学習を続けたい高校生が 5 割強程度なのは、楽しいだけでは高校生の要求に十分応えていないことを示すのだから

うか。「いいえ」の 15.2%は、意外に多い。設問 9 の「あまり楽しくない」の 11.9%と「楽しくない」の 5.8%を合わせた 17.7% に近い数字なので、「いいえ」の 15.2%の数字とおおむね連動しているのだろうか。

12. フランス語を学ぶことは自分の将来に役立つと思いますか。

	全体	830	
1	はい	516	62.2%
2	いいえ	64	7.7%
3	わからない	250	30.1%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の 62.2%は、設問 11 のフランス語の継続学習の回答で「はい」が 53.6%だったのに対して、やや多い。6割以上の学生がフランス語学習の将来的有益性を肯定している。

13. フランス語を学ぶことは英語学習の参考になりますか

	全体	830	
1	はい	201	24.2%
2	いいえ	287	34.6%
3	わからない	342	41.2%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の 24.2%は少ない。「いいえ」の 34.6%は、第一外国語としてのフランス語学習者として想定される約 10%を引いても、約 24%の高校生がフランス語と英語は別物と見なしている。このように理解する高校生の数を減らすには、フランス語と英語は共有している部分が多いので、一方の学習が他方の学習に役立つことを授業で理解させることも必要だろう。

14-1. 授業に取り入れてほしいことはなんですか。(3つまで選択可)

	全体	824	
1	ドリルや小テスト	115	14.0%
2	DVD鑑賞などによる文化理解	511	62.0%
3	CDを利用した聞き取り練習	143	17.4%
4	シャンソンやフレンチ・ポップスなどの歌	236	28.6%
5	寸劇・スケッチ	69	8.4%
6	検定のための演習	74	9.0%
7	スピーチや暗誦の発表や準備	47	5.7%
8	料理実習	322	39.1%

9	ゲーム	206	25.0%
10	外部講師による講演	90	10.9%
11	その他	25	3.0%

複数回答可で、回答者は平均 2.2 項目を選んでいる。「DVD鑑賞などによる文化理解」の 62.0%は、当然な数字だろう。映像を通じて早く文化理解に進みたいからだ。そして耳からフランス語やフランス文化にアクセスしたいという「シャンソンやフレンチ・ポップスなどの歌」の 28.6%や「CDを利用した聞き取り練習」の 17.4%の数字も当然だろう。「料理実習」の 39.1%は、昨今の料理ブームの反映でもあろう。実際の授業での「料理実習」は難しいだろうが、工夫次第で仮想「料理実習」ならばできるだろう。「ゲーム」の 25.0%についても、単語テストや基礎作文に応用できるだろう。「ドリルや小テスト」の 14.0%や「検定のための演習」の 9.0%も無視できない。フランス語能力のグレードアップに役立つのだから、授業との関係を模索すべきだろう。「外部講師による講演」の 10.9%は、大学生の学習態度より好奇心旺盛ぶりが窺える。「寸劇・スケッチ」の 8.4%や「スピーチや暗誦の発表や準備」の 5.7%についても、希望者には課外活動等に対応すべきという数字だろう。

15. フランス語学習で特に難しいと感じることを一つ選んでください。

	全体	824	
1	単語や熟語	102	12.4%
2	文法	273	33.1%
3	聞き取り	124	15.0%
4	発音	175	21.2%
5	読解	18	2.2%
6	作文	34	4.1%
7	会話	37	4.5%
8	文字	14	1.7%

「文法」の 33.1%は、大学生と同じ第一位である。「発音」の 21.2%と「聞き取り」の 15.0%もまた、大学生にあっても同じような反応が多く見られる。「単語や熟語」の 12.4%、「作文」の 4.1%、さらには「会話」の 4.5%、「読解」の 2.2%は、意外と少ない。授業内容の「文法」「発音」「聞き取り」「単語や熟語」「作文」等の時間的配分との関係があるのだろうか。

16-1. フランス語の検定試験は知っていますか。

	全体	828	
1	知っている	541	65.3%

2	知らない	286	34.5%
---	------	-----	-------

「知っている」の 65.3%は、かなり多い。授業内容や担当教員の方針によって、かなり左右される数字だろう。

16-2. 知っている検定試験。

	全体	489	
1	実用フランス語検定試験（仏検）	485	99.2%
2	DELF	34	7.0%
3	TCF	7	1.4%

「実用フランス語検定試験（仏検）」の 99.2%は、他の検定試験同様に知名度は高い。しかし、「DELF」の 7.0%や「TCF」の 1.4%は、意外と少ない。

17-1. 設問 16で「知っている」と答えた人に質問します。

	全体	360	
1	検定試験は受験したことがある	144	40.0%
2	検定試験は受験したことがない	201	55.8%

「検定試験は受験したことがある」の 40.0%は、設問 16-1の「知っている」の 65.3%とは必ずしも連動していないことを示す。

18. 設問 16で「知らない」と答えた人に設問します。機会があれば検定試験に挑戦したいですか。

	全体	428	
1	はい	186	43.5%
2	いいえ	133	31.1%
3	わからない	109	25.5%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」が 43.5%なので、受験をさらに推奨すれば、検定試験の受験者は増えるだろう。

19. 機会があればフランス語のコンクールに挑戦してみたいですか。

	全体	823	
1	はい	135	16.4%
2	いいえ	454	55.2%
3	わからない	234	28.4%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の 16.4%は、少なく見えるが、第 1 外国語としてのフランス語学習者が約 1 割なので、むしろ喜

ぶべき数字だろう。「いいえ」の 55.2%は、第 2 外国語の学習者の数から言えば予想できる数字だが、尻込みする学生がやや多すぎるだろう。

20. フランス語を学ぶことで、自分の視野がひろがりましたか。

	全体	828	
1	はい	506	61.1%
2	いいえ	93	11.2%
3	わからない	229	27.7%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の 61.1%は、多くの高校が国際理解の一環としてフランス語の授業を推進しているのので、現在は授業がおおむね良好であることを示している。「いいえ」の 11.2%は、不本意フランス語学習者（設問 9 の「あまり楽しくない」の 11.9%と「楽しくない」の 5.8%を合わせた 17.7%）から予想される数字からすれば、やや少ない。

21. 現在の国際社会で、英語が話せれば十分であると思いますか。

	全体	831	
1	はい	221	26.6%
2	いいえ	421	50.7%
3	わからない	189	22.7%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「いいえ」の 50.7%は、フランス語等の外国語の需要期待がまだまだあることの証左であり、複言語志向があることも示している。「はい」の 26.6%は、フランス語学習は実践するだけではなく、教養を高めた趣味のためということを意味しているのだろう。

22. フランス語を話す国や地域に行ってみたいですか。

	全体	831	
1	はい	680	81.8%
2	いいえ	49	5.9%
3	わからない	102	12.3%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の 81.8%は、自己表現・実践志向の強い高校生からすれば、当然な数字だ。

23. 行ってみたい国・地域の具体例。

（回答票を点検しないかぎり不明だが、最終報告には示せるだろう）

24-1. フランス語圏に短期・長期留学や、研修旅行の企画があれば、ぜひ参加したいですか。

	全体	828	
1	はい	436	52.7%

2	いいえ	145	17.5%
3	わからない	239	28.9%
4	その他	8	1.0%
5	該当なし	0	0.0%

未記入の回答は「わからない」として統計処理をした。「はい」の52.7%は、設問23の「はい」の81.8%からすれば、少ない。留学や研修と一般的旅行とはまったく別なものだと考えていることが分かる。「いいえ」の17.5%も少なくない。しかし、大学生対象の同種の設問31と回答（「ぜひ留学したい」13.8%、「機会があれば行ってみたい」54.9%、「関心はない」31.2%）とを比べると、高校学習者の方が留学志向が高いと言えるだろう。